

一人ひとりをいかす

教室づくりによる

「学力向上」を目指す研究

岡山県学力向上プロジェクト 学カステップアップハイスクール事業

平成 29 年度～令和元年度

岡山県立和気閑谷高等学校

## ご挨拶

岡山県立和気閑谷高等学校

校長 香山 真一

本校は、平成 29 年度から 3 年間、岡山県の「高等学校学力向上プロジェクト 学力ステップアップハイスクール事業」の指定を受け、研究主題を「『一人ひとりを生かす教室』づくりによる「学力向上」を目指す研究」と定めた。これは、本校の前身が岡山藩の作った旧閑谷学校であることに由来する。旧閑谷学校は、藩校とは別に、庶民も入学を許された郷校で、日本最古の公立学校である。いわゆる多様性（ダイバーシティ）を大切にし、学ぶ意思ある者を受け入れ、一人ひとりの資質・能力を伸ばす教育が行われていた。そこで、現代における「郷校」として「一人ひとりを生かす教室」づくりをすることが本校の使命であると考えたのである。

学力の概念については、平成 19 年に学校教育法が改正され、A 基礎基本の知識・技能、B それを活用して課題を解決するための思考力・判断力・表現力等、C 主体的に学習に取り組む態度という 3 要素で再定義された。新学習指導要領では、この 3 要素が育成すべき資質・能力という概念で再整理され、A 何を知っているか、何ができるか（個別の知識・技能）、B 知っていること・できることをどう使うか（思考力・判断力・表現力等）、C どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか（学びに向かう力、人間性等）とされ、各学校では教育目標とともに育成したい資質・能力のより具体的な姿を明示することが求められる。

本校では、この 3 年間の研究を経て、基礎基本の知識・技能を土台にし、自分を理解する力、職業とつなぐ力、考える力という認知的な力（思考力・判断力・表現力等）と、行動する力、チームワーク力、自立する力という非認知的な力（学びに向かう力、人間性等）、そして認知・非認知の両側面を持つコミュニケーション力の 7 つの力を持って、地域とつながる力を実践できる探究人を育成しようというスクール・ポリシーに結実した。

では、学力あるいは資質・能力の 3 要素をどのように育成するか、である。本校が取り組んだのは、それぞれの要素ごとに評価の指標を設けて一人ひとりの学ぶ質を高めやすくすることである。

A の学力あるいは資質・能力については、入学時の段階で各人に大きな隔たりがあることから EdTech（Education & Technology）を活用するための Wi-Fi 環境を平成 29 年度末に整備した上で、平成 30 年度入学生から一人 1 台 iPad を持たせて数学の AI ソフトの Qubena や追手門学院大学の MANABOSS を活用した。iPad の管理は事務室が担当している。令和元年度には、岡山大学の寺澤孝文教授による英単語完全学習ソフトも加わった。生徒の中には中学時代にはまったロールプレイングゲームよりも AI が個別最適化して提供する数学の問題の方が面白いと言って没頭する者も出てきた。寺澤教授からもある程度意欲のある者には内発的意欲に近い指標（自分からやろうという意識）の得点が有意に上がる結果が出てきたという朗報も届いた。集団準拠評価によるペーパーテストの成績が向

上する者が増えた一方で、意欲を失って家庭学習をしていない者も少なからずいて、引き続き課題となっているのも事実である。

Bの学力あるいは資質・能力については、パフォーマンス課題と目標準拠評価（ループリック）を工夫して、すべての生徒の学習意欲を引き出そうと教員室で各教科がスクラムを組んで当たった。本校では、本時の目標、学習の手順、達成規準（基準）を授業の額縁としてラミネートしたものを各教室にマグネットで貼付して活用しているが、「本時の問い」も加わって魅力的な実践が出現した。平成30年度からは教職員一人ひとりが本校ホームページに実践をA4版2ページにまとめて掲載するようになり、令和元年度にも受け継がれている。

Cの学力あるいは資質・能力については、①スケジュール管理の「論語手帳」、②総合的な探究（学習）の時間「閑谷學」、③個人内ポートフォリオ評価であるOPP(One Page Portfolio)、④MSC評価（Most Significant Change）、⑤ラーニング・レビュー・ミーティングについて組織的に取り組んだ。①は、授業開始前の朝の会で、スケジュール帳の見開き左ページに記された「今週の論語」を朗読する取組である。自己の在り方生き方を省察する習慣づくりとして一定の効果がある。②1・2年次のチームによる探究学習発表会を経て、3年次の個人による卒業探究発表会でのプレゼンやポスターセッションは探究人であろうという志を養うのに効果がある。③教科の単元や閑谷學、行事などを通して自分の成長を言語化し省察する効果は大きい。④クラス単位で学期ごとに最も大きな学びの変化を考え、岡山大学の高旗浩志教授や広島大学の山元隆春教授を招いての学力向上評価委員会でクラス代表として生徒の立場から授業改善策を述べた後、全校集会で報告する。「授業を良くする責任は生徒にある」という3年次の発表は脳裏から消えない。⑤7月と12月に実施する保護者を招いての3者懇談の際に、生徒が自らの成長を保護者と教師の前でプレゼンする。イギリスのロックザム小学校ではこれを通して学力が増大した。カンファレンスの在り方がポイントになる。

以上の包括的な取組によって、生徒たち一人ひとりが大逆転といえる成長を遂げたと言いたいところであるが、そこは容易に事が運ばない。

しかし、非認知的な側面において、確かに生徒は成長し、誇りを持って卒業探究発表会で後輩や地域の方々に語りかける。7つの力の自己評価も年次を追うごとに高くなる。

令和元年度、本校は文部科学省の「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（地域魅力化型）」の指定を受けた。長期ループリックを作って生徒と目標を共有して授業改善を進めたい。また、文部科学大臣優秀教職員表彰も教職員組織としていただいた。

生徒とともに「学校を良くする責任」を分かち合い、一足ひとあし前へ進んでまいりたいと存じます。引き続き、関係の皆様方の御支援・御協力を賜りますようお願い申し上げます。

令和2年2月

ようこそ、一人ひとりをいかす学園へ

広島大学大学院教育学研究科  
教授 山元隆春

香山真一校長から「学力向上プロジェクト・アドバイザー」の委嘱を受けたのは2017年3月のことでした。ちょうど、吉田新一郎・山崎敬人両氏とキャロル・アン・トムリンソンの『ようこそ、一人ひとりをいかす教室へ―「違い」をいかす学び方・教え方―』（北大路書房、2017年）発刊の頃のことでした。もともと国語教育学が専門であり、学校経営について専門的に研究をしていたわけではなく、迷ったのですが、尊敬する香山先生が校長をなさっている学校を見てみたいという思いに負けて、お引き受けしました。

先生方の授業をはじめて拝見したときに、強く感じたのは、生徒とともに学ぶスタンスを、スタイルはさまざまに築いてこられた先生方が、共有されているということでした。そして、生徒に向き合いながら寄り添おうとする姿です。まずはお互いに授業でなにをしているかを知り、意見を出し合いながら、お互いに改善策を探っていくというコミュニティが形づくられていることに感銘を覚えました。

驚いたのは、学校評価についての委員会にはじめて参加した時でした。生徒たちの代表も参加しますということ、研究主任の荒金恭子先生からうかがったときには、正直に言って驚きました。そのような学校評価の会議をわたくしが知らなかったからです。その会議に参加している生徒委員たちの発言をうかがいながら、再び驚きました。きちんと「学び」のことを語ることで、自分たちの課題を踏まえた発言をし、先生方に主張すべきところはきちんと主張していくのです。こうした、生徒と先生との対話が成り立つ土壌はどのようにつくられてきたのか。

生徒たちと先生方が「目標」を語る言葉を共有することができていたからではないかと、幾度も訪問するうちに強く思うようになりました。それは、生徒の力を多角的に、多面的に見極めていこうとする努力があったからこそです。また、「MSC 評価活動」等で生徒たちの「選ぶ力」と「振り返る力」を育てています。自立のためにもっとも大切なことです。そして、生徒たちが先生たちや友だちに質問しながら、頼りながら、自分の学びを深めていっていたということです。いずれも、いまの自分の営みをそれ以外の何かとつなげながら意味づけることを可能にします。それが和気閑谷高校での「深い学び」の原動力だと思います。

このようにして生徒の一人ひとりをいかしていかれた、香山校長先生をはじめとする和気閑谷高校の教職員の皆様に大変多くのことを学ばせていただきました。幸せな生徒たちです。また、一緒に委員をつとめさせていただきました岡山大学の高旗浩志教授の、常に学校全体を見通し、機微を感じ取ったうえで発されるコメントに多くを学ばせていただきました。

厚く御礼申し上げます。和気閑谷高校という、一人ひとりをいかす学園の営みが、さらに深まり広がっていきますように。

## おわりのはじまりに寄せて

岡山大学教師教育開発センター  
教授 高旗 浩志

歴史と伝統ある岡山県立和気閑谷高等学校。私が初めてお訪ねしたのは平成 28 年 11 月 17 日でした。「どの子ども自分ののび（伸び）を実感できる授業（単元）」の研究 — 深化版」が当時の研究主題でした。既に理想的とも言える校内研修（研究授業と研究協議）の方法が確立していました。①教科の先生方による事前の手厚い指導案検討、②校内研究主題と授業者の研究仮説（提案性）の共有、③観察対象の生徒を分担し、授業中の変容に着目した授業参観、④③で作成した観察記録に基づく研究協議の 4 点です。学校を挙げて継続的な授業改善に取り組み、ここまでの質を実現できた高校は希有な存在でした。

折しも次期学習指導要領の概要が明らかとなり、「育成すべき資質能力」に基づいて既存の学力観・評価観・授業観に大きな転換が迫られていました。また少子化が加速度的に進むなか、全国的に学校統廃合や規模縮小が現実味を帯びてきていました。こうした外的変化に対して、和気閑谷高校は「学校単位の組織的授業改善」という「本質」に収斂する取組を重ねています。単なる「生き残り」を超えた取組です。無理矢理に生徒を変えようとするのではなく、社会への PR を急ぐのでもありません。まず、授業を見つめ直す。そして教師が変わる。この取組の蓄積が、和気閑谷高校の強みだと言えるでしょう。

日本の教師の授業力の高さは国際的にも定評があります。しかし、それは「教師が教えきろうとする力」であり、それゆえに「本来生徒が責任を負うべき学習の本体を教師が肩代わりしてしまっている」とも言われます。「おとなしく教えられる客体」ではなく、「自ら学習する主体」を育む授業が必要なのです。そのためには、①意欲の差を生まない授業、②わかったフリをさせない授業、③教師が教えきるのではなく生徒に学び取らせる授業に変わる必要があります。もちろん「知識伝達型の授業はダメで、すぐにも課題解決型の授業に変わる必要がある」と短絡してはいけません。わかりやすく議論を整理したつもりが、極端な二項対立を生むことは本末転倒です。どちらも必要なのです。習得・活用・探究の学習場面を適切に配分し、単元のまとまりで授業を構想する力が求められるのです。

平成 29 年から 3 年にわたる取組の中で、和気閑谷高校の生徒たちが「授業を良くする責任は自分たちにもある」という気づきに辿り着いたことは、決して数値にできない素晴らしい成果です。このような成果を導いてこられた香山真一校長、研究主任の荒金恭子先生をはじめ、和気閑谷高校の先生方に心からの敬意を表します。また、広島大学教授の山元隆春先生とご一緒させて頂いたことは、私にとってとても大きな財産となりました。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

今後、人の異動はあろうとも、この 3 年間の取組が和気閑谷高校の授業改善を支える文化・方法として定着し、さらに創造的な展開がはじまることを、心よりお祈りします。

目次  
岡山県学力向上プロジェクト  
学カステップアップハイスクール事業 岡山県立和気閑谷高等学校研究収録

ご挨拶	2
巻頭言	4
巻頭言	5
目次	6
I 研究の概要	7
1 研究主題	7
2 研究期間	7
3 研究主題設定の理由	7
4 研究体制	8
5 期待する成果と検証方法	8
II 具体的な取組	9
1 授業改善の取組	9
2 準拠評価（「高校生のための学びの基礎診断」を含む）	23
3 ICTの効果的な活用～MANABOSS（マナボス）～	26
4 人工知能型教材「Qubena（キュビナ）」活用に係る成果と課題	28
5 閑谷學	30
6 生徒による自治活動～学校スローガン・行動憲章～	38
III 研究の成果と課題	40
1 成果（その1）	40
2 成果（その2）	40
3 課題	43
おわりに	45

# I 研究の概要

## 1 研究主題

「一人ひとりをいかす教室」づくりによる「学力向上」を目指す研究

平成 29 年度岡山県の「高等学校学力向上プロジェクト 学力ステップアップハイスクール事業」を受け、本校は「学習指導の改善に関する研究」として、上記主題を設定した。

## 2 研究期間

平成 29 年度から令和元年度までの 3 年間

## 3 研究主題設定の理由

### (1) 現状分析

平成 28 年度末、上記研究主題を設定するにあたって、現状を次のように分析した。

学習場面において、生徒の主体性を導き出すための学習目標や学習手順の明示と学習の振り返りの機会の確保、ICT を活用した効果的な支援、生徒の人間力を育成するための対話的な学習の実践を全教員で行ってきた。その結果、授業の形式、いわゆる、「額縁」をつくる点においては、統一的なものになってきている。

しかし、年度末に実施する学校満足度アンケート等の結果から、「意欲的な活動」や生徒の「成長実感」をたずねる質問項目に対して、約 7 割の生徒が、意欲的に学校生活を送り、成長を実感しているが、残り約 3 割の生徒が「意欲的な活動」や「成長実感」に対して否定的な自己評価をしている。

### (2) 目指す姿

そこで、本研究では、学校全体で有機的に学力向上を図る仕組みを整えることによって、生徒一人ひとりが成長実感を持てるようになることを目指すべき姿とした。

### (3) 「目指すべき姿」にたどりつくための方法

学習指導に関しては、授業の形式（額縁）に加え、内容においても共通性を持たせ、組織的、計画的に取り組む。具体的には、右図にあるように、生徒の意欲を高められる学習課題を提示し単元として授業を構想準（以下「ループリック」という。）を生徒と共有し、また、より高い評価に誘う手立て（以下「足場掛け」という。）を生徒一人ひとりが自ら選択して主体的に取り組めるようにする。そして、この積み重ねが、生徒一人ひとりの学力向上につながっていく。

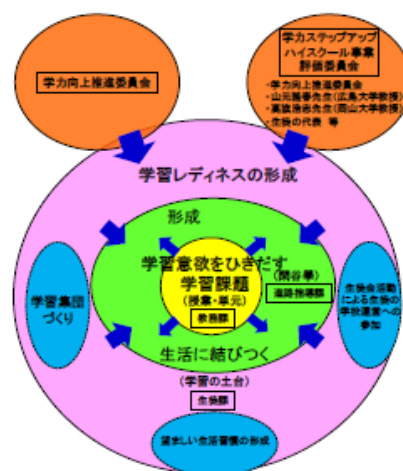


図 1 学校組織による学力向上の仮説

そして、上記学習指導をより効果的に行うために、キャリア形成や学習レディネスの形成にも取り組んでいく。具体的には、総合的な学習の時間を通じて進路意識を向上させ、学習集団づくりや望ましい学習習慣の形成、生徒会活動による学校運営への参画等を通じて、生徒一人ひとりの学びに向かう土台をつくっていく。

#### 4 研究体制

研究推進組織として学力向上推進委員会を、評価組織として学力向上評価委員会に外部有識者（広島大学山元隆春教授、岡山大学高旗浩志教授）及びクラスから2名ずつ代表生徒（H29・H30は評議会委員、R元は有志）を加えた学力向上評価委員会をそれぞれ設置する。詳細は図2（図はR元年度のもの）のとおりである。

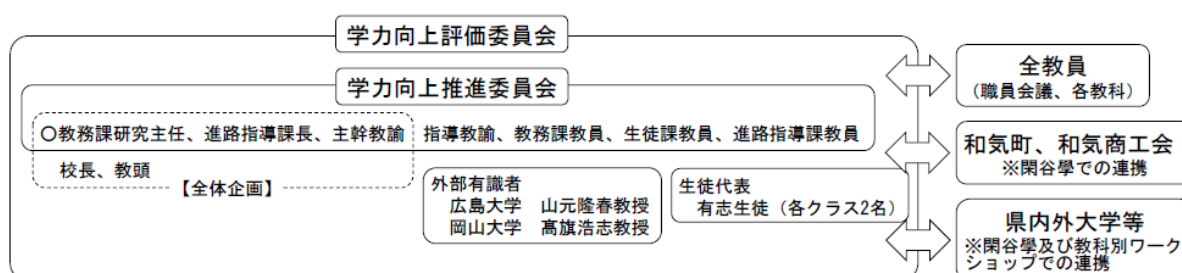


図2 研究組織

#### 5 期待する成果と検証方法

期待する成果は、生徒と教師とが探究的な学習課題を解決する授業を、ともにつくっていく過程を通じて、生徒一人ひとりがより主体的に学びに向うことができ、思考力・判断力・表現力や知識・技能が身につくモデルを提示できることである。

これは、新学習指導要領に示される「学力」の3要素、「知識・技能（A学力）」、「思考力・判断力・表現力（B学力）」、「学びに向かう力、人間性等（C学力）」のうち、特に意欲や態度にかかわるC学力に働きかける取組を、生徒と教職員とが協力して、学校の全ての教育活動を通じて実践することで、結果的に、A学力とB学力を伸ばしていこうとするモデルである。

検証方法は、次の①～⑤のような方法を用いて、生徒の変容を「量」と「質」の両面から検討する。

- ① 目標準拠評価の結果
- ② 個人内評価の実施  
一枚ポートフォリオの活用による生徒の内的変化の読み取り。
- ③ 集団内評価の実施  
MSC評価による集団としての変化の読み取り。
- ④ 集団準拠評価  
基礎力診断テストによる各学力層の上位層への移行。
- ⑤ 学力の土台となる生徒のレディネスの実態把握。



学習実態調査、生徒対象学校満足度アンケート、学校評価アンケート、QU（学校生活における生徒個々の意欲や満足感、及び学級集団の状態を測る質問紙による測定調査）、七つのチカラアンケート（生徒のキャリア形成発達「自分を理解する、職業とつなぐ、考える、行動する、コミュニケーション、チームワーク、自立する、各チカラを質問紙により測定）による計量的評価。

## II 具体的な取組

### 1 授業改善の取組

#### (1) 取組の経緯

この項目では、授業改善に向けて3年間に取り組んだことを述べる。

##### ア 平成29年度（1年目）

平成28年度までの授業改善の成果（全教職員による学習目標や学習手順の明示と学習の振り返りの機会の確保、ICTを活用した効果的な支援、生徒の人間力を育成するための対話的な学習の実践）を継続深化しつつ、C学力に働きかけながらB学力を育成する授業、つまり、生徒の学ぶ意欲を引き出す探究的な学習課題やその授業（単元）づくりを目指した。そのために次の①②の研修に参加、または実施した。

- ① 教科で1名以上ずつ、国際バカロレア機構主催研修へ16名参加（7～8月）。
- ② 学習課題やルーブリック実践に関する疑問を明らかにするための校内研修（11・12・1月）を実施。

##### イ 平成30年度（2年目）

次の①②の研修を通じて、探究的な学習課題やその評価について学び、その成果を全教職員が実践報告としてホームページ（以下「HP」という。）にアップした。

- ① 教科ごとに大学や専門機関と連携してワークショップ（以下「WS」という。）を開催した（のべ16の研修を実施・参加）。
- ② 定例の職員会議後に30分程度を利用して、授業改善を進めていく上での課題を共有し、工夫を学び合う校内研修（年9回）。

##### ウ 令和元年度（3年目）

前年度あがった課題「学習に集中できる教室環境づくり」を解決するために、前年度の①②の研修を継続深化させ、本年度も実践報告をHPにアップした。さらに、平成29年度から実施していた学力向上評価委員会のうち、今年度は11月に2回、1月に1回研究授業と公開授業を実施し、その後研究協議と外部講評委員からの指導助言を受ける学びの場を設定した。

令和元年度の取組については、詳細を、さらに次の章で述べる。

## (2) 校内研修、教科別 WS 等による学び合い

本校では、例年、約 3 分の 1 の常勤の教職員が異動となる。また、1 学年の定員が 120 名であり、担当する教科によっては 1 名の教員ということもあり、上記のような授業改善の取組を継続発展していくため、2 つの方向から研修体制を構築した。1 つ目は、授業を組み立てる教職員一人ひとりが大学などの専門機関とつながって主体的に授業改善を深めていける教科別 WS である。2 つ目は、学校として目指していることを教科の枠を超えてサポートしていくために定例の職員会議や学力向上評価委員会での研究授業の機会を通じての教職員同士による学び合う校内研修である。



5月27日の研修の様子

### ア 教職員一人ひとりが大学などの専門機関とつながって主体的に授業改善を深めていける教科別 WS

各教科が主体となって、大学等の専門機関とつながりパフォーマンス課題を含めた単元づくりや授業実践、長期ループリックの作成や実践に関して専門的な見地からの指導をうけた。今年度の実施状況は表 1 のとおりである。

### イ 定例の職員会議後の校内研修

テーマは次のとおりであり、各回 20 分～30 分程度実施した。

#### ○ 4 月 1 日 和気閑谷高校の授業について考えよう

（「授業の額縁（目標・手順・達成基準の明示と省察機会の確保等）」の実践の再確認と、昨年度までのパフォーマンス課題の好事例の紹介、今年度の計画（表 2）を提示し、全員が実践報告を完成させること、7 つのチカラと関連した長期ループリックを作成することを共有する）

#### ○ 4 月 22 日 教科の 7 つのチカラと成長を実感できる授業づくり

（教科別のグループで、教科の 7 つのチカラをすり合わせ、授業を実施しての情報交換）

#### ○ 5 月 27 日 「授業の額縁」と「ループリック実践」を共有しよう

（「本時の目標」「学習の手順」「達成基準」等を示した、1 時間分の板書の写真共有し、工夫点や苦労しているところなどについて、説明しあう）

#### ○ 7 月 19 日 二学期の「授業」づくりに向けて

- ・長期ループリックと 7 つのチカラの実践イメージを持つ
- ・ICT の活用実態について

（上記 2 点を目的に、同僚の実践報告を共有し、グループで話し合う）

#### ○ 9 月 21 日 2 学期の研究授業・公開授業、生徒 MSC 評価等の予定連絡

- 10月18日 授業実践報告をよりよいものにするために  
(今年一番に完成した実践報告執筆者から報告の記載に係る注意点の伝達と協議)
- 11月18日 11月21日の公開授業の運営にかかわる最終確認
- 12月17日 新カリキュラムに向けて①ディプロマポリシー②長期ループリックの検討(教科ごとにグループを編成し、①令和2・3年度の教育課程において各類型で育てたい力について考える。②国語科の長期ループリック(案)を参考に教科の7つのチカラと連動させたものにする話し合い)
- 1月8日 令和元年度授業改善取組報告～生徒の学習意欲を引き出す学習課題の実践報告～(各自が作成した実践報告をもとにグループに報告する)
- 3月4日 学校の指導になかなか乗れない3割の生徒の心に届く指導をするために、どうすればよいか?(今年度の成果と課題から、次年度の目標と見通しを考える)

ウ 学力向上評価委員会(6・11・1月開催)の機会を利用しての教職員による学び合い

学力向上評価委員会は、学力向上と進路保証が有機的に結びついているか検証する場として、大学教員、本校教職員、本校生徒代表とが多角的に教育活動を評価する場として上記3期に、5回実施した。特に、研究テーマに沿った学習指導の改善がその主たるものとなるため、11月と1月には研究授業と公開授業に全教職員で参加し、お互いの授業を評価し合った。

授業参観の視点	
①	「一人ひとりをいかす教室」づくりがどのようになされているか。
②	①による「学力向上」の実際場面がどのようなものであったか。
③	②の具体的な方法として授業者の作成したループリックへの到達具合について、ループリックの基準の妥当性の検討。
④	ループリックに到達するための足場かけがどうであるか。特に、到達の困難が予想される生徒に対する効果的な足場掛けの検討。

(ア) 研究授業

図3 授業参観の視点

令和元年11月16日(木)実施

1年普通科標準コース「数学A」授業者：岡本安宜教諭

1年3組「簿記」授業者：柴谷 祐人教諭

指導・助言 高旗浩志教授(岡山大学)

参加者全員がどちらかの授業を1時間参観し、図3授業参観の視点①～④で気づきを付箋に記入し、視点を絞ってグループ協議を行った。教職員アンケートからも、全ての教職員が「スキルアップに役立つ」と肯定的回答をしており、「今までの知識を使い、どこまでの解決を求めていくのか、共通認識をもたせる」「腑におちていない子たちへの手立て」等、参加者一人ひとりにとって学びが深まった。

(イ) 公開授業

令和元年6月18日(火) 5限(公開授業のみ)

令和元年11月19日(火) 6・7限

(授業の実際は表3参照)

令和2年1月16日(木) 6・7限

11月には、23講座と二年次閑谷學(のべ38名の教職員)、1月には27講座(のべ35名の教職員)の授業について、全員で参観し、図3授業

参観の視点①～④による気づきを付箋に記入し、それをもとに協議を行った。



研究協議の様子(上・下)



表1 令和元年度の教科別WSの実施状況

教科別ワークショップ(7. 19現在)					
	教科	形式 A本校でワークショップ B校外で研修	講師(所属)	実施日①	実施日②
1	国語	A	宮本浩治先生(岡山大学)	7月25日(木)	1月15日(水)
2	数学	B	岡崎正和先生(岡山大学)	7月31日(水)	11月14日(木)
3	外国語	A	調子和紀先生(ノートルダム清心)	7月26日(金)	1月末
4	地歴・公民	B	桑原敏典先生(岡山大学)	8月22日(木)	10月31日(木)
5	理科	A	藤本義博先生(岡山理科大学)	7月10日(水)	
6	保体		2018年度までの全国大会の実践授業について共有	未定	
7	家庭	B 高教研家庭部会 家庭科教員研修会	京都大学大学院教育研究科 京都大学教育学部 特任教授 北原琢也 先生	8月20日	
8	情報	B	全国スクールリーダー育成研修会(京大)	8月18日	
9	芸術	B全日本高等学校書道教育研究会岡山大会	文部科学省教科調査官 豊口和土氏	11月14, 15日	
10	商業	A	松田寿雄先生(岡山商科大学)	10月30日(水)	11月14日(木)
11	福祉	B 高教研家庭部会 家庭科教員研修会	京都大学大学院教育研究科 京都大学教育学部 特任教授 北原琢也 先生	8月20日	
	数学	岡本	全国スクールリーダー育成研修会(京大)	8月17日	8月18日
		福田裕也	全国スクールリーダー育成研修会(京大)	8月17日	8月18日
	商業	柴谷	全国スクールリーダー育成研修会(京大)	8月18日	
	外国語	松嶋	全国スクールリーダー育成研修会(京大)	8月18日	
	国語	岡	全国スクールリーダー育成研修会(京大)	8月18日	
		長谷川	全国スクールリーダー育成研修会(京大)	8月18日	

表2 令和元年度 授業改善の年間計画

<p>令和元年度</p> <p><del>平成30年度</del> 高等学校学力向上プロジェクト（完成年度）に関わる 授業改善の年間計画について</p>	
<p>1 研究主題</p> <p>(1) 学校における研究主題</p> <p>「一人ひとりをいかに教室」づくりによる「学力向上」を目指す研究</p>	
<p>2 1年間の取組予定 (○：職員会議後の授業改善に関わる情報共有)</p>	
<p>4月1日</p> <p>4月22日</p> <p>5月11日2限</p> <p>5月13日</p> <p>5月27日</p> <p>6月17～21日</p> <p>6月21日</p> <p>6月18日</p> <p>7月2～6日</p> <p>7月～8月</p> <p>7月19日</p>	<p>○学校経営計画WS + 「和気関谷高校の授業について考える」</p> <p>○教科の7つのチカラと成長を実感できる授業づくり</p> <p>PTA総合授業参観</p> <p>シラバス提出締め切り</p> <p>○</p> <p>公開授業週間（各教科の研究授業）</p> <p>○</p> <p>第1回学力向上評価委員会・授業公開（5限）</p> <p>「望ましい学習の態度・意欲ルーブリック」の実施</p> <p>※教科別ワークショップ①の実施期間※</p> <p>○公開授業週間後の情報共有</p>
<p>8月17・18日</p> <p>8月20日</p> <p>8月29日～</p> <p>9月20日</p>	<p>★全国スクールリーダー育成研修会（京都大学）<sup>7</sup> 参加可能</p> <p>○</p> <p><u>教科の7つのチカラと長期ルーブリックの提示開始</u></p> <p>○</p>
<p>10月18日</p> <p>10月～2月</p> <p>11月11～15日</p> <p>11月14日</p> <p>11月18日</p> <p>11月19日</p>	<p>○</p> <p>※教科別ワークショップ②の実施期間※</p> <p>公開授業週間（各教科の研究授業）</p> <p><u>公開授業・研究授業（数学、商業）第2回学力向上評価委員会（T）</u></p> <p>○</p> <p>指導教諭公開授業・第2回学力向上評価委員会（Y）</p> <p>MSC評価の実施</p> <p><u>授業実践報告（PDFした完成版）の提出締め切り</u></p> <p>○</p>
<p>11月29日</p> <p>12月16日</p>	<p>○</p>
<p>1月8日</p> <p>1月16日</p> <p>1月21日</p> <p>2月3日</p> <p>3月3日</p>	<p>○各教科の実践報告</p> <p>第3回学力向上評価委員会（T）5限授業公開</p> <p>第3回学力向上評価委員会（Y）5限授業公開</p> <p>○</p> <p>○</p>

研究授業<sup>9人</sup>32人  
授業見学<sup>14回</sup>

- 通年で実施されるもの
- 「望ましい学習の態度・意欲ルーブリック」の実施（4、7、10、12月）
  - 各自の実践報告（第2回会議資料をご参考ください）
  - 生徒によるMSC評価※
  - 研究集録の執筆

表3 11月19日の公開授業時間割

11月19日(火)【6限】の時間割					教務課
	6限	本時の目標 (問い)	達成基準 (B基準)	授業 担当者	
	14:10~14:55				
1-1	社会と情報 (2FPC教室)	検定に向けて、速度・文書の練習をする。	集中して検定の練習に取り組むことができたか。	立石/森脇	
1-2	体育 (体育館)	[バドミントン]相手をゆさぶり、ポイントを狙え。	ペアで協力し、ラリーを続けることができた。	木村	
1-3	音楽 (音楽教室)	「ふるさと」の楽譜を作成し、ギターでメロディーとコードを演奏する	「ふるさと」の楽譜を完成させ、ギターでメロディーが演奏できたか。コード演奏に挑戦できたか。	藤原か	
	書道 (書道教室)	完成した漢字仮名交じりの書を、他者に説明したり自己分析する。	自分の言葉で良さを説明できたか、他者の意見を聞く姿勢ができたか。	研山	
	美術 (美術教室)	自作色紙で、黒の台紙に貼るパーツをつくる。	明度対比、色相対比を使い効果的な配色ができたか。	小川	
2-A	数学Ⅱ (121)	三角関数のグラフはどんな形？	$y=\sin\theta$ 、 $y=\cos\theta$ のグラフの形がわかり、書くことができる。	高原	
2-B	数学Ⅰ (122)	どんな命題を偽というのか？	命題の真、偽が判定できたか。	岡本	
2-C	生物β (生物教室)	バナナやジュースからDNAを抽出する。	実験操作に従ってDNAを抽出することができたか。	下野	
2-3	保健 (124)	発表を聞いて、わかったことを自分の知識にする	発表内容がどれくらい身についているか？まとめのプリントを完成させる	和氣	
3-A	コミュニケーション英語Ⅲ (131)	一人ひとりが、他の人に本文内容を分かりやすく説明することができる。	調べた内容を他の人に分かりやすく説明ができたか。板書が適切であるかどうか。	小賀	
3-B	数学A (132)	角に関する性質を用いて、星形の1つの角を求めよう。	友人と協力 or 個人で、諦めずに考える姿勢が見られる。	太田悠	
3-C	古典B (133)	桐壺は、なぜ病んだの？	本文を正確に現代語訳し、状況を理解できる。	岡	
3-3	現代文B (134)	豊太郎はいい奴？	本文の記述を根拠にして主人公に対する自分の意見を持つことができる。	荒金	

### (3) 学力向上評価委員会の取組

年間3回(6・11・1月)、学力が向上する仕組みがその通りになっているかを評価する場を設けた。具体的な実施時期は次のとおりである。参加者は、8ページ図2「研究体制」にあるように、外部評価委員に加え、授業を受ける本校生徒も参加する組織とした。

ア 平成29年度

第1回6月20日 公開授業、29年度の取組の報告と評議会委員の代表生徒4名か

らの意見聴取 講評：山元・高旗両先生

第 2 回 11 月 16 日 研究授業(外国語・福祉)・研究協議、MSC 評価講評：高旗先生

11 月 21 日 指導教諭の公開授業(保健・国語)、MSC 評価講評：山元先生

第 3 回 1 月 23 日 1 年間の取組報告と評議会委員の生徒 16 名からの意見聴取  
講評：山元・高旗両先生

#### イ 平成 30 年度

第 1 回 6 月 19 日 公開授業,平成 30 年度の取組の報告(前年度の外国語科のパフォーマンス課題の取組等)と生徒からの意見聴取 講評：山元・高旗両先生

第 2 回 11 月 13 日 研究授業(理科・保健)・研究協議,MSC 評価、講評：高旗先生

11 月 20 日 指導教諭の公開授業(国語)山元先生からの講評と講演

第 3 回 1 月 22 日 1 年間の取組報告と評議会委員の生徒 16 名からの意見具申  
講評：山元・高旗両先生

#### ウ 令和元年度

第 1 回 6 月 18 日 公開授業,平成 30 年度の取組の報告(前年度の家庭科の実践報告等)と生徒からの意見聴取 講評：山元・高旗両先生

第 2 回 11 月 14 日 研究授業(数学・商業)・研究協議,MSC 評価 講評：高旗先生

11 月 19 日 公開授業(23 講座)・研究協議 講評：山元先生

第 3 回 1 月 16 日 公開授業(23 講座)と研究協議 講評：高旗先生

1 月 21 日 1 年間の報告と代表生徒 16 名からの意見具申 講評：山元先生

それぞれの会で得た生徒、外部評価委員の意見を事業評価に生かしながら取り組むスタイルが確立した。次年度もこの取組を形骸化させることなく継続させていく予定である。

#### (4) 取組の進捗状況

前述した研修等を受けた、令和元年度末までの授業改善に関わる取組の進捗状況を述べる。

##### ア パフォーマンス課題

パフォーマンス課題の定義について、E.FORUM 教育研究開発フォーラム・用語解説では、「リアルな文脈の中で、様々な知識やスキルを応用・総合しつつ何らかの実践を行うことを求める課題」であり、「具体的にはレポートや新聞といった完成作品や、プレゼンテーションなどの実技・実演を評価する課題」としている。本校でも、生徒の学ぶ意欲を引き出し、思考力・判断力・表現力を伸ばす学習課題として、全教職員で授業改善に取組み、その成果の普及を目的として、平成 30 年度・令和元年度の 2 年間本校ホームページ(<http://www.wakesizu.okayama-c.ed.jp/>)にアップしている。2 年間の取組を表 5・6 にある一覧に示した。

平成 30 年度、令和元年度の実践報告について、パフォーマンス課題の分類及び項目は、吉田他 2018 を参考に、一部変更の上、枠組みを作成した。(表 4) な

お、分類については、次の表に基づき、その判断は教科で行った。

また、令和元年度は、本校が卒業時に身に付けさせたい資質能力である7つのチカラ（1 自分を理解する力、2 職業とつなぐ力、3 考える力、4 行動する力、5 コミュニケーション力、6 チームワーク力、7 自立する力）も明記した。

表4 パフォーマンス課題分類内訳

内容	習得：パフォーマンス課題を学ぶことによって、新しく教科内容を学ぶこと。
	活用：単元での学びや既存の知識を活かし、課題解決に取り組むことが目指されるもの。
文脈	生活：生徒の身の回りに関連して課題が設定されるもの。
	シミュレーション：「あなたが〇〇だったら～」とある立場を設定しその時どう考えるかを問うもの。
	学級や学校：学級や学校の中で文脈を設定しているもの。「下級生に向けて・・・する」など。
	教科：教科内容にかかわる問題解決を求めるもの。
活動形態	個人・ペア・グループ・全体から主な活動形態を選択
求められるパフォーマンス	説明：「説明しよう」や課題に対する論述を求める内容のもの。
	発表：論理的にわかりやすく表現をもとめるもの。
	創作：単元を通して成果物をつくるもの。
	活動・実践：習得した技術・技能を用いた活動や実践を求める内容のもの。

吉田成章・佐藤雄一郎・山根万里佳「論理的思考力の育成に向けた高等学校カリキュラムの構造と課題—パフォーマンス課題を軸とした取組における『評価』の問題—」広島県立庄原格致高等学校編『研究紀要—平成29年度国立教育政策研究所指定【論理的思考】実践報告書—』、2018年、105-138頁を一部改変



表5 2018年度パフォーマンス課題一覧

		パフォーマンス課題の内容												4求められるパフォーマンス					
教科	名前	1 内容			2 文脈				3 活動形態					説明	発表	創作	活動・評価		
		活用	習得	両方	生活	教科	シミュレーション	学級・校内	個人	ペア	グループ	全体	数平入カ					数平入カ	数平入カ
国語	荒木	1					1				1					1			
	岡	1			1					1		1			1	1			
	福田	1			1						1		1		1				
	荒金	1			1							1			1	1			
	長谷川	1				1					1		1		1				
数学	高原	1				1						1		1					
	大野	1				1						1		1					
	太田悠	1				1						1		1					
	佐田	1						1				1		1		1			
外国語	鏡花			1		1						1		1	1	1		1	
	浮田			1				1				1		1		1	1	1	
	小宮・緑花	1	1					1				1		1	1	1	1	1	
	瀧川			1				1						1					
地歴	藤澤							1				1		1		1			
	八幡				1	1							1		1			1	
	大森				1			1				1		1					
	下垣	1						1				1		1		1			
	池上	1	1					1				1		1	1	1			
理科	原田				1			1				1	1	1	1	1		1	
	石井	1						1				1		1		1		1	
	下野	1						1				1		1	1	1			
	木村							1						1				1	
保健	和氣																		
	鈴木					1	1					1	1					1	
	西田				1	1	1					1		1		1			
情報	立石			1								1		1				1	
	安東	1										1		1		1			
商業	野本	1						1						1				1	
	杉本	1												1			1		
	赤島	1				1						1		1		1			
福祉	稲岡	1						1				1				1	1		
	森口																		
芸術	宮部			1	1													1	
	中村				1	1								1				1	
	古賀					1	1										1	1	
合計	35				19	3	11	14	12	9	0	10	1	21	8	19	19	6	9

表6 令和元年度パフォーマンス課題一覧

教科	名前	パフォーマンス課題の内容		1 内容							2 文脈				3 活動形態				4 求められるパフォーマンス				7つのチカラ						
		活用	習得	両方	生活	教科	シミュレーション	学校・学校	個人	ペア	グループ	全体	説明	発表	創作	活動・実践	1 自分を理解する力	2 職業とつながる力	3 考えを伝える力	4 行動する力	5 コミュニケーション	6 チームワーク	7 自ら学ぶ力						
国語	太田 伸	1	1		1	1			1			1	1			1	1												
	岡											1				1	1	1											
	福田	1			1					1		1				1	1	1					1						
	荒金	1			1					1	1	1						1				1		1					
数学	長谷川		1							1		1				1	1					1		1					
	高原	1			1										1	1	1							1					
	福田		1			1						1						1				1	1	1					
	太田 悠	1					1					1						1				1	1	1					
外国語	岡本	1			1					1		1						1				1	1	1					
	松嶋	1	1				1				1				1	1					1	1	1	1					
	浮田	1	1				1				1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1					
地歴	小賀	1	1		1						1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1					
	岸田	1			1					1					1	1						1	1	1					
	藤澤	1	1		1		1			1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1					
	八幡	1					1				1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1					
理科	大森		1			1				1					1														
	下垣	1					1					1																	
	大山		1			1				1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1					
	原田			1		1				1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1					
保健	石井	1				1				1	1				1	1	1	1	1	1	1	1	1	1					
	下野	1	1		1						1				1	1	1	1	1	1	1	1	1	1					
	木村	1				1				1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1					
	和氣	1	1		1						1				1								1	1					
家庭	鈴木					1	1			1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1					
	西田	1	1		1	1				1					1	1	1	1	1	1	1	1	1	1					
	立石		1				1			1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1					
	安東														1	1	1	1	1	1	1	1	1	1					
商業	真野	1			1					1				1															
	柴谷	1			1					1				1															
	赤島	1			1					1				1															
福祉	森脇	1			1					1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1					
	小川	1				1				1				1															
芸術	中村				1					1				1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1					
	上野	1			1					1				1															
合計	34			24	13	2	17	11	6	1	20	5	14	5	17	14	5	17	11	5	27	16	11	9	7				

イ 「7つのチカラ」とつながる教科の長期ルーブリック

令和2年度に向けて、どの教科でも長期ルーブリックを使って付けたい資質・能力を示していくため、令和元年度は、次のことに取り組んだ。

- ・教科のシラバス・年間計画に教科の7つのチカラを入れたものを提示・作成。(5月)
- ・教科の「7つのチカラ」一覧の作成・検討。(6月)
- ・長期ルーブリックの活用イメージを職員会議後の研修で共有。(7月)
- ・作成した「7つのチカラ」とつながる教科の長期ルーブリック案の完成と検討。(8月下旬)
- ・第1回高大接続部会で作成した長期ルーブリック案や教科の7つのチカラについて協議し、修正。(9～11月)
- ・第2回高大接続部会に「7つのチカラ」につながる教科の長期ルーブリックとして国語科の案を提示し、意見をもらう。(12月)
- ・12月の職員会議後の研修で国語科を例に他教科も修正版の作成を依頼。

年度当初の作成した長期ルーブリック（上）と修正版（下）

岡山県立和気開高高等学校 国語科の「7つのチカラ」と長期ルーブリック（案）				
長期ルーブリックを達成することを通じて、教科の「7つのチカラ」を身につけていきます。				
◆【教科の「7つのチカラ」】				
1 自分を理解する力	2 職業とつなぐ力	3 考える力	4 行動する力	
従来の自分の人生の歩み方を考えていくにあり、自分を理解し、自分らしさを確立していくことが大切です。「自分を理解するチカラ」では、積極的に自分の興味・価値観・長所を確認し、将来につながる力を育てます。	将来を考えていくためには、様々な職業を具体的に知り、職業を体験し、自分が職業を通して社会とどのように関わるかを考えていくことが大切です。「職業とつなぐチカラ」では、様々な体験から動労観・職業観を育み、職業選択をしていく力を身につけます。	何かに遭遇したときや情報を手に入れたときに深く考え意思決定し実行することは大切です。考えることで問題を解決する方向に導かれます。「考えるチカラ」では、論理的思考力や創造する力を身につけることで意思決定できる力を育てます。	世の中の様々な情報を取り入れるためには、自ら動き、選択し実行していくことが必要です。「行動するチカラ」は、実際に前に一歩踏み出す力を育てます。	
<b>自己、他者、教材との対話を通じて、自分の興味・価値観・長所などを確認する力。</b>	<b>言語活動を通じて職業理解の基礎となる考え（動労観・職業観）を形成する力や職業に就くために必要な言語に関する能力。</b>	<b>言語活動を通じて論理的に考えたり、創造的に考えたりできる力や深く共感したり豊かに想像したりする力。</b>	<b>課題解決に向けて、実際に前に一歩踏み出すことのできる力。</b>	
調査点・パフォーマンス点・OPPシート・自己評価アンケート	調査点・パフォーマンス点・OPPシート・自己評価アンケート	調査点・パフォーマンス点・OPPシート・自己評価アンケート	パフォーマンス点・OPPシート・自己評価アンケート	
5 コミュニケーション力	6 チームワーク力	7 自立する力		
話す態度や聞く態度を学び、相手の気持ちを理解することは、良い人間関係を形成するのに役立ちます。「コミュニケーション力」では、お互いを理解しあう人間関係を構築する力を育てます。1対1のやりとりだけでなく、少人数での意見交換、多数に自分の考えを伝えることを学びます。	生活や仕事の様々な場面では、チームワークが必要です。「チームワーク力」ではチームにおける様々な役割の意味や意義について理解し、その場に応じて適切な役割や責任を果たそうとする力を身に付けます。また、相手の立場に立つて考え互いに支え合い取る姿勢を学びます。	社会の激しい変化に対応して生きていくことは大切です。「自立するチカラ」では、よりよい生活や生き方を表現するためにスキルアップをめざします。		
<b>他者との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えを伝わり深めたりすることができる力。</b>	<b>グループや集団における様々な役割の意味や意義について理解し、その場に応じて適切な役割や責任を果たしたり、相手の立場に立つて考え互いに支えあったりしながら、国語の知識や考えを深める力。</b>	<b>言葉を通じて自己や他者、社会とよりよく関わろうとする力。</b>		
調査点・パフォーマンス点・OPPシート・自己評価アンケート	パフォーマンス点・OPPシート・自己評価アンケート	パフォーマンス点・OPPシート・自己評価アンケート		
◆国語科長期ルーブリック				
(注)「達成度2」は全員に身につけて卒業してほしいレベルです。「達成度1」に達しない「達成度0」（表記していない）は、単位の認定ができないレベルです。				
観点	到達度		達成度	
	達成度1	達成度2	達成度3	
国語への関心・意欲・態度（学びに向かう力）	言葉にかかわる興味関心を持ち、やる気を持っておおむね課題に取り組めるが、課題の内容によってはあきらめやすくなることもある。	言葉にかかわる興味関心を持ち、課題でわからないことをあきらめずに考えることができる。	言葉に関する興味関心を持ち続け、手だてなどを自分の生活に結びつけ、自分の課題として考えていくことができる。	
聞く・話す（思考・判断・表現）	相手の話を聞いたり、自分の考えを相手に伝えることができる。	話のポイントや相手の反応を意識して、聞いたり、話したりできる。	互いの立場を尊重して、聞いたり、話したりできる。発表・グループでの協議・討議・対話など、目的や場面に合わせて、話の構成や表現方法を工夫できる。	
書く（思考・判断・表現）	自分の考えを書くことができる。	自分の考えをわかりやすく書くために、次の三点を、考えることができる。 ①読み手の存在。 ②段落の役割など意識した文章の構成や展開を考える。 ③根拠を挙げる。	目的や場面に合わせて、次の二点を工夫して書くことができる。 ①読み手にふさわしい文の構成や表現方法の選択。 ②論理の展開（納得できる根拠と主張）を考えて文章を構成する。	
読む（思考・判断・表現）	書き手が自分に伝えたいことを読み取ることができる。	書き手が自分に伝えたいことを読み取るために次の二点を、考えることができる。 ①文章の中心的部分を読み取り、要旨をまとめる。 ②場面や登場人物の関係、心情の変化などから主題を捉える。 読み取ったことを基に、筆者や語り手の考えを踏まえて、自分のこととして考えたりする。	文章の展開に合わせて、論理や物事の展開の仕方や構成を評価して考えることができる。 読み取ったことを基に筆者のものの見方や考え方を客観的に評価して考えることができる。 筆者や語り手と対話しながら、人間、社会、自然などについての自分の考えを深めたりする。	
基本的な知識 日常生活に必要な国語常識。 (例)漢字、敬語、文法などに関する知識。	チェックテスト等で習得の程度が25パーセント以上である。日常生活の中で、少しづつ、その知識を生かそうとしている。	チェックテスト等で習得の程度がおおむね50パーセント。かつ、日常生活の中で、その知識を生かすことができる。	チェックテスト等で習得の程度がおおむね80パーセント以上。かつ、日常生活の中で、その知識を積極的に生かすことができ、よりよく生活しようとしている。	

国語科長期ルーブリック				国語科の「7つのチカラ」	
観点	到達度1	到達度2	到達度3	1 コミュニケーション力	2 チームワーク力
国語への関心・意欲・態度（学びに向かう力）				グループや集団における活動の中で「コミュニケーション力」を適用して思いや豊かに話し合い、互いに支えあっていることができるように課題解決する力。	
「国」の心を育み、他者と共感する態度	グループや集団活動において、言葉を通じて他者とつながり、思いや考えを伝えるとともに、他者の考えにも耳を傾けることができ、課題解決や探究活動に役立てようとしている。	グループや集団活動において、言葉を通じて他者とつながり、思いや考えを伝えるとともに、他者の考えを注意深く聞くことができる。課題解決や探究活動のために互いに貢献しようとしている。	グループや集団活動において、言葉を通じて他者とつながり、思いや考えを伝えるとともに、他者の考えを注意深く聞くことができる。また、発表・グループでの協議・討議・対話など、目的や場面に合わせて、話の構成や表現方法を工夫できる。	自分の思いや考えを伝えるために、三つの「聞く」「聞く」「聞く」をさまざまな場面で活用する力。	言葉を通じて自分の考えを表現し、他者や社会とよりよく関わろうとする力。
聞く・話す（思考・判断・表現）	相手の話を聞いたり、自分の考えを相手に伝えることができる。	話のポイントや相手の反応を意識して、聞いたり、話したりできる。	内容をより深く理解するために読解力を活用することができる。また、発表・グループでの協議・討議・対話など、目的や場面に合わせて、話の構成や表現方法を工夫できる。	目的や場面に合わせて、次の二点を工夫して文章を書くことができる。 ①読み手にふさわしい文の構成や表現方法の選択。 ②論理の展開（納得できる根拠と主張）を考えて文章を構成する。	他者の意見を良く聞き、話し合いを通じて課題解決を図る力。
書く（思考・判断・表現）	自分の考えを書くことができる。	自分の考えをわかりやすくするために、次の三点を取り入れて文章を書くことができる。 ①読み手の存在。 ②段落の構成や展開。 ③根拠。	目的や場面に合わせて、次の二点を工夫して文章を書くことができる。 ①文章の中心的部分を読み取り、要旨をまとめる。 ②場面や登場人物の関係、心情の変化などから主題を捉える。	3 考えを伝える力	他者の意見を良く聞き、話し合いを通じて課題解決を図る力。
読む（思考・判断・表現）	書き手が自分に伝えたいことを読み取ることができる。	書き手が自分に伝えたいことを読み取るために次の二点を考えることができる。 ①文章の中心的部分を読み取り、要旨をまとめる。 ②場面や登場人物の関係、心情の変化などから主題を捉える。	目的や場面に合わせて、次の二点を工夫して文章を書くことができる。 ①文章の中心的部分を読み取り、要旨をまとめる。 ②場面や登場人物の関係、心情の変化などから主題を捉える。	1 他者と共感する力	他者や状況にふさわしい言葉の適切な使用能力
基本的な知識 日常生活に必要な国語常識。 (例)漢字、敬語、文法などに関する知識。	チェックテスト等で習得の程度が25パーセント以上である。	チェックテスト等で習得の程度がおおむね50パーセントである。	チェックテスト等で習得の程度がおおむね80パーセント以上である。		
(注) 教科の長期ルーブリックが達成されることを目的として7つのチカラを定めています。 ●2) 達成度1以上について卒業してほしいレベルです。「達成度1」に達しない「達成度0」（表記していない）は、単位の認定ができないレベルです。 ○7つのチカラと教科の観点の融合 ○目標や生徒数に応じて					

## ウ 学修ルーブリック

「進路」「学習」「学校生活」「課外活動」の4つの場面において、本校の生徒として望ましい姿を示した、「学校生活を振り返ろうルーブリック」(下図)を作成し、学期ごとに自分の成長を自己評価するために活用した。この評価をもとに、生徒はiPadや論語手帳を活用して、7月・12月の三者懇談で学期ごとの自らの成長を語る事ができた。

岡山県立和気開谷高等学校 学校生活を振り返ろうルーブリック <span style="border: 1px solid black; padding: 0 2px;">1学期</span> 月 日 ( ) 実施		評価基準 (自己評価する際の具体的な判断基準)			自己評価	評価理由
		A (とてもよい)	B (よい)	C (わるい)		
進路	進路に関する準備	自分の実際に合った目標を考えて記入する。	自分の実際に合った目標を考えて記入する。	やりたいことが見つかっていないので、何もしていない。		
学習	授業 開谷学	授業で示される目標をよく理解し、自分の進路に結び付けて意欲的に取り組むことができる。	学習で示される目標に取り組むことができている。	ただなんとなく授業を受けている。		
	家庭 学習	宿題・課題を着実にこなすのはもちろん、自分の弱点の克服や強みを伸ばすための学習にも取り組んだ。	指示された宿題・課題がだいたいできた。	宿題・課題ができていないことがあった。		
学校生活	学校での生活態度	「行動憲章」を意識して、自分だけでなく、クラスや学校が良くなるよう行動できている。	規則や指示を守った生活が送れ、そつなく行動することができた。	生活習慣が乱れたり、だらしない行動をとったりすることがあった。		
	出席状況	健康管理に気を付けて、遅刻・欠席・早退もほとんどなく生活できた。	だいたい登校できたが、体調や生活リズムを崩すことがあった。	体調や生活リズムを崩しがちで、遅刻・欠席・早退がしばしばあった。		
	清掃	担当する清掃箇所すみやかに移動し丁寧に掃除できる。	担当する清掃箇所を、掃除することができる。	清掃箇所に行かなかつたり、移動が遅かったり、まじめに作業ができなかった。		
	服装や頭髮・化粧	ルールを守ることを理解して、自覚ある行動ができる。	ルールをだいたい守ることができている。	注意されると、ただすことができるが、注意されなければ、ルールを守ることができない。		
課外活動	学校行事・委員会・部同好会	自分自身や集団全体の進歩・成長につながる行動をし、成果を語る事ができる。	自分自身や集団全体のためにおおむね活動できた。	積極的に活動に参加しなかった。		
	ボランティア・社会貢献	積極的に活動に参加し、活動を通して得られた自分の成長を具体的にしっかり語る事ができる。	学校でのボランティア活動等を通して自分の成長を意識することができた。	積極的に活動に参加しなかった。		

年 組・コース 番 名前 \_\_\_\_\_

## エ 評価

(ア) 学力向上評価委員会の多面的評価の一つとして実施したMSC評価

### a 平成29年度の取組

MSCとは、「最も(Most)」「よくあらわれた(Significant)」「変化(Change)」の略である。24名の評議会委員の生徒が「授業を通してクラスが変わったことは何か」について書いた作文の中から、生徒自身が、「最も大きな変化」の作文を選んだ。実際は、11月16、21日の会議に、それぞれ12名ずつ参加して、学年毎に発表した作文の中から、それぞれ一つの作文を選考し、発表した。12月20日の全校集会では、24人全員が登壇し、選考基準や選考した作文、外部評価委員である山元隆春先生(広島大学大学院教授)や高旗浩志先生(岡山大学大学院教授)からの助言や、会議に参加した感想を報告した。

それぞれのグループが発表した内容は次のとおりである。

11月16日参加者は選考基準を「全員（先生・生徒）が授業をつくっていることがみられた」として、次の作文を発表した。（枠内はその作文である）

夏前に行われた学力向上評価委員会から今日の授業に関して、変わったことを話したいと思います。

大きな変化というと、先生が進めていくだけの授業ではなく、生徒にどのように進みたいかを聞いてくれる先生が多くなったということです。そうした授業では、生徒は自ら授業をつくっていくことができ、参加しやすくなりました。それによって、以前よりも授業中に寝ている生徒が少なくなり、とても授業を受けやすい環境がつかれていると思いました。

もう一つとてもよい点があります。それは、答えのない答えです。自分がどのように感じて、どのように読み取ったか、そしてその人だったら私はこうしていただろうと、自分たち一人ひとりを生かしてくれる授業が増えたということです。自分の意見を認めてもらったように感じるので、分からないところでも、何か書くという癖がついて、考える力も身につけていると思います。

なので、これからも生徒自ら考え、答えを見つけていけるような、授業をみんなで作ってあげたいと思います。

11月21日参加者は選考基準を「答えが間違っても自分の考えたことを発言する生徒の主体性がみられた」として、次の作文を発表した。

自分のクラスでのプラスの変化は、授業に集中して取り組んでいることだと思います。特に現代文です。授業では先生が生徒に問題を問いかけても一定の人しか答えていなかったけれど、受験に対して意識し始めたのもあってからか、問われた問題に対して発言している人が多くなっていることが変わったと感じています。

教室の様子が変わった点は2つあります。1つ目は答えが間違っても自分の考えたことを発言している。2つ目は、問題に悩んでいる友達がいたら教えてあげていることです。

これらのことから、皆が授業に対する意欲や授業に取り組む姿勢が前向きに感じられました。自分自身、授業を受けている中で、他の人の意見を聞いて共感する事もあるし、ヒントを得ることができています。

よって私は、友達との協力や授業の雰囲気が変わったことがプラスの変化だと思いました。

#### b 平成30年度の取組

24人の評議会委員の生徒が「授業を通してクラスが変わったことは何か」について書いた作文の中から、生徒自身が、「最も大きな変化」の作文を選んだ。実際は、11月13日の会議に、学年毎に発表した作文の中から、それぞれ一つの作文を選考し、発表した。12月20日の全校集会では、24人全員が登壇し、選考基準や選考した作文、外部評価委員である高旗浩志先生（岡山大学大学院教授）

からの助言や、会議に参加した感想を報告した。

以下は、発表の要旨である。

1 年次：全クラスに共通のこと、iPad に触れているものという基準で選び、「iPad の良いところを述べている」「クラスの団結」を述べている作文を選定。

2 年次：「授業が受けやすくなり、気軽に質問できる。」「グループ活動を全員でする。」を基準とし、「全員」というというキーワードを決め手として、「役割分担で、1人ひとりに必ず役割がある。ひとりに頼りすぎないようにしている。」を述べている作文を選定。

3 年次：「協調性や同じ目標をもつこと」を基準として、「お互いが助け合い、それぞれのクラスを伸ばして、自分達の個の力を伸ばす。」「それぞれに目標があるから、それを叶えるためにどうするか考えていきたい。」という趣旨の作文を選定。

成果は、生徒と教師がともに授業をつくっていくスタイルが一層深まってきたことである。

課題は、「学習に取り組む環境を全員でつくる」ことに向き合うことである。このことについては、12月7日、校長から生徒に向けて、「和気閑谷高校 行動憲章（案）」として、具体的に次の提案があった。

「信」 仲間の挑戦を邪魔せず、支える。

「勤」 分からないことをそのままにしない。

「儉」 質素・謙虚に取り組む。

この提案を受け、クラスで（12月10日）話し合われたことをもとに、生徒会役員、評議会委員で（12月20日）第1回目の検討が行われた。詳しくは、「生徒による自治活動～学校スローガン・行動憲章の取組～」の項を参照されたい。

#### c 令和元年度

令和元年度は、学力向上評価委員会に参加する生徒を、各クラスから2名ずつ有志を募り、その生徒が評価活動の中心を担った。学習の当事者である生徒が評価する場の一つとして位置づけ、2学期に、授業における「一番重要な変化」について全生徒を対象に調査した。クラスごとに集計した結果を持ち寄り、12月20日に、学年ごとに8名の代表生徒によってMSC評価を実施した。手順は、まず選考基準を決め、次にその基準に照らしてクラスの一番重要な変化を選考し、12月24日の全校集会で発表した。

1 年次 基準：意見交換ができ学びが深まる。

結果：現代文のグループワークをする場面。

2 年次 基準：より意欲的に授業を受ける。

結果：該当する授業なし

3 年次 基準：いい授業にする責任は生徒にある。

結果：コミュニケーション英語の生徒が授業をする場面。

「該当する授業はない」と報告した2年次では、生徒に対しては、「ただ授業を受けるだけでなく、先生が設定した目標も達成できるように授業を受ける」ことを呼びかけたうえで、授業の進度など、授業に対する生徒の要望について、教師と生徒とがコミュニケーションがとれる環境にしていくことの必要性を訴えた。

M S C評価を実施して見えてきた成果は、生徒と教師がともに授業をつくっていくスタイルが一層深まり、授業や学校をよくしようとする生徒が増えてきたことである。課題は、今後ますます、「学習に取り組む環境づくり」をすすめていく必要があることだ。生徒と教職員とのコミュニケーションをよりよくして、一層両者がともに目指す授業をつくっていくかなければならない。



#### (4) 学校評価アンケート

毎年2学期に実施する「学校評価アンケート」の授業にかかわる教職員質問項目「授業内容の充実、改善に努めており、成果が感じられる。」に対して「よくあてはまる」「ややあてはまる」と肯定的に回答した教職員の割合は、82.9% (H29) →82.3% (H30) →90.5.% (R1) であった。また、生徒質問項目「各授業内容は工夫されてわかりやすく学力向上に役立っている」に対して肯定的に回答した生徒の割合は、75.2% (H29) →69.6% (H30) →75.9% (R1) であった。

#### (4) 成果と課題

成果は、パフォーマンス課題・長期ループリックについても、一定の前進があった点である。また、生徒と教師がともに学び合う学校風土が形成されつつあることである。

課題は、教科横断的な課題の研究については本校の総合的な探究の時間である「閑谷學」における生徒が探究を進めていくにあたって、複数教科の教員から指導を受けた生徒事例もいくらかは見られるが、意図的・計画的な実践までには至っていないことだ。また、長期ループリックについても、本校が育てたい生徒像がより具体化できる、本校独自の長期ループリックの作成を目指すこと、あわせて、作成したループリックをどう活用していくかについても、今後さらに工夫していかなければならない。

また、生徒による評価の項でも述べたが、より落ち着いた学習環境を整備していくことについても生徒とともに取り組んでいかなければならない。

## 2 準拠評価(「高校生のための学びの基礎診断」を含む)

本校の学力向上を目指した取組の特徴は、前述のとおり生徒と教師が探究的な問いを共有して授業をつくっていく過程を通じて、学びに向かう力の育成を図ることである。学びに向かう力が醸成されたならば、生徒が主体的に「知識・技能」及び「思考力・判断力・表現力」を学んでいけることを目指している。

上記の成果の一つの指標として、本校の3年間の学びを広げかつ深めるために、生徒が上級学校への進学目標が明確となり、自らの進路を実現していった。一例として、この3年間の国公立大学の現役合格者は平成29年度に2名、平成30年度1名、令和元年度は3名(1月末現在)と健闘している。合格者は全員AOまたは推薦入試で合格しており、本校生徒の主体的な学びの取り組みや目指す学部・学科で求められる「学力」の要件を満たしていると評価されたものと考えている。

1・2年次普通科進研模試の成績上昇者の共通事項として、概ね、後述するMANABOSSの取組状況、特に正答率が高い割合をしめしている。MANABOSSでの取組を前向きに捉えている者も複数おり、上記上昇者についても、学習に対して、主体的な取組ができつつあるものと考えられる。

しかし、準拠評価(進研模試や基礎力診断テスト)における最終の学力到達ゾーン(以下GTZと略す)では、合格に値する指標よりも一つまたは二つ下のGTZにあたる成績の生徒が多かった。

#### (1) 3年間の準拠評価の学力向上への取組

##### ア 平成29年度

基礎力診断テストの実施に当たり、各年次団、及び、国語科、数学科、英語科の協力のもと、事前指導を行うことができた。授業、土曜塾、HR課題と様々な取組によるものではあったが、生徒の「学習サイクル」構築に向けて取り組めた。1、3年次は成績の伸びはあまりみられなかったが、2年次は、BCゾーンの生徒数に顕著な伸びが見られた。平成29年度はWeb動画へのログイン作業を7、8月に1、2年次生全員を対象に実施し、夏の特別授業の中での取組を行った。ただし、その後の取組には十分繋がることはできなかった。

##### イ 平成30年度

この年度は、概ね授業内などを利用し、基礎力診断テストの事前指導を行うことができた。事後指導の例として、1年次の11月のD3ゾーンの割合が前回よりも改善された。またCゾーンも前回より改善された。2年次においては11月のD3ゾーンの割合は前回と同じであったが、Cゾーンが前回よりも改善された。3年次においては前回と同レベルの成果であった。

D3の生徒対象に、Web動画、リコメンド問題を補講の形で実施した。

またこの年度よりMANABOSSを本格実施した。この取り組みは後述(ICTの効果的な活用①)にある。成果として言語(国語)、非言語(数学)の基礎学力が向上したと、よく活用した生徒から、利用した生徒は志望校の入試に大いに役立った回答を多数得た。一方主体的に取り組めず指定された学習量が期限内に達成できなかった



生徒は本校で放課後、教員の指導で学習を確保した。しかし半ば強制された学習であったため、生徒と教員ともに心理的負担が大きく、生徒の主体的な取り組みを引き出すかが課題となった。

#### ウ 令和元年度

基礎力診断テストの事前指導を授業と家庭学習で行った。結果の概要；1年次は進研模試と11月基礎力でのDゾーンは4月から減少、Cゾーンが4月から向上、2年次は進研模試と11月基礎力でのDゾーンが減少、Cゾーンが向上した。3年次は4月と比較し現状維持であった。

上位層に関して1年はB層が現状維持、2年はB層が増加。3年次は低下した。今後も上位層が厚くなる指導を検討したい。(この要因分析については後章に譲る。)

令和元年度はMANABOSSの学習範囲未達成者を放課後に校内で指導せず、自主的に行えるよう5月から月に1回、計7回クラス対抗の校内テストを行った。

	28年度	29年度	30年度	令和元年度			元年度末
				4月	(7)月	(11)月	
1	【1年次】ベネッセ学習到達ゾーン(以下GTZ)におけるDゾーンの割合			基礎力	進研+実力	進研+基礎力	進研+実力
	実績値:	67%	65%	63%	68.00%	75.60%	66.40%
2	【1年次】ベネッセGTZにおけるCゾーンの割合			基礎力	進研+実力	進研+基礎力	進研+実力
	実績値:	27%	28%	29%	26.90%	19.30%	31%
3	【1年次】ベネッセGTZにおけるBゾーン以上の割合			基礎力	進研+実力	進研+基礎力	進研+実力
	実績値:	6%	7%	9%	5%	5%	5.20%
4	【2年次】ベネッセGTZにおけるDゾーンの割合			基礎力	進研+実力	進研+基礎力	進研+実力
	実績値:	83%	82%	79%	81.10%	83.10%	73.10%
5	【2年次】ベネッセGTZにおけるCゾーンの割合			基礎力	進研+実力	進研+基礎力	進研+実力
	実績値:	12%	15%	14%	14.20%	15.80%	20.20%
6	【2年次】ベネッセGTZにおけるBゾーン以上の割合			基礎力	進研+実力	進研+基礎力	進研+実力
	実績値:	5%	3%	7%	4.70%	0.90%	6.70%

表 和気閑谷高校 1・2年次生 平成29～令和元年度準拠評価の成績推移(概況)

#### (2) 成果と課題

3年間の成果として集団準拠評価の3教科(国語・数学・英語)総合の数値における特徴的な効果は、4月実施の状況と年度末を比較すると、すべての年次で11月時点ではGTZの比率が改善されたが、3年間を通じた成績向上という成果は得られなかった。その要因を考察するに、本校生徒の特徴として、多くの生徒が家庭学習の習慣が入学時点で未定着であり、本校在学中にも改善傾向が見られない事があげられる。前述のように、本校では生徒と教師が探究的な問いを共有して授業をつくっていく過程を通じて、学びに向かう力の育成を図ることだが、生徒の主体的授業参加への意欲の高まりに比べ、家庭学習時間が伸長していない。この差をどのように埋めていくのかを来年度以降検討したい。

### 3 ICT の効果的な活用～MANABOSS（マナボス）～

#### (1) MANABOSS について

MANABOSS とは、追手門学院大学のアサーティブプログラムにおいて利用されている、基礎学力定着のための学習支援プログラムのことである。

本校では就職・進学してから困らない学力をつけさせたいとの思いで、平成 29 年 11 月から利用している。



#### (2) 実際の運用

##### ア 平成 29 年度

進路決定者全員および、入学試験対策をしたい希望者を対象に登録をした。(103名)入学試験対策をした者の中に、学力が伸びた生徒を確認できた。

##### イ 平成 30 年度

生徒を限定せず、全校の取り組みとした。

① “基礎学力 2”内の「言語能力問題」「非言語能力問題」より、5 期に分けて 50 問ずつ取り組む

② “基礎学力 2”内の「実力テスト」(言語・非言語どちらも含む)において、5 割以上の得点を目指して取り組む

取り組みが不十分な生徒は放課後居残りとした。(多いときには半分近くの生徒が該当)

また、特に積極的に取り組んだ生徒は年度末に表彰を行った。(14 名)授業内での利用にも取り組んだ。

#### 年度終わりに生徒にとってアンケート結果

一週間の取り組み		主に使う端末		これから活用するか		学力がついたと思うか	
毎日	3	PC	70	はい	191	はい	136
4～5日	2	スマホ	156	いいえ	119	いいえ	185
2～3日	10	iPad	99				
1日	62						
0日	233						

H30 年度 1 年次生 112 名、2 年次生 117 名、3 年次生 112 名 対象

アンケート実施は H30 年 12 月である。

##### ウ 令和元年度

前年度の取組を受けて、「居残りの生徒に気を取られ、頑張っ取り組んだ生徒に普段から声をかけ、励ますことに力を入れることができていない」と考えたことから、「生徒が自ら勉強したいと思う仕掛けづくり」をテーマに運用した。

登録は全員するが、取り組みは任意とし、月に一度クラス対抗の小テスト（15点満点）を行った。

表 MANABOSS 取組状況（左）と小テストの分野及び平均点（右）

学年	言語能力問題 回答者数	言語能力問題 平均解答数 (平均正答数)	非言語能力問題 回答者数	非言語能力問題 平均解答数 (平均正答数)	小テストの分野及び平均点		
					分野	1位得点	平均点
1年	75名	5.5問 (2.5問)	23名	7問 (6問)	第1回 漢字①	11.29点	6.7点
2年	41名	10.1問 (5.2問)	17名	3.3問 (2.0問)	第2回 表の読み取り	9.88点	6.5点
3年	2名	24.3問 (8.3問)	1名	8.1問 (2.1問)	第3回 熟語	9.00点	4.3点
					第4回 言葉の意味	8.29点	5.3点
					第5回 料金の割引	4.26点	3.8点

また、第3回評価委員会においてMANABOSSについて上記のような経緯の説明をした。さらに出席生徒に対して『去年より、さらに主体的に取り組める仕組みになっていたか?』という質問をしたところ、生徒からは、「主体性というのは、生徒が出した意見なのか?」「自分の順位が知りたい」「小テスト対策をする時間をとってほしい」などの意見が出ており、生徒とともに作っていく意識が欠けていたことに気づかされた委員会となった。

### (3) 成果と課題

#### ア 成果

MANABOSSは受験の時に頼れるツールだという意識が生徒の中に根付いている。似ている問題が出題される上級学校も紹介し、担任から声をかけた結果進んで取り組んでいる生徒もいる。ただし、人数は多くないのでさらに継続していく必要がある。

また、教員に広く普及できていないが、授業内での活用も考えられる。国語や数学で利用した際には、同じ分野の問題を繰り返し短時間で復習できることで、理解を確実にするのに効果的であることが実際の生徒の声などから確認できた。iPadを全員が所持している状況では、より一層活用しやすい。

#### イ 課題

本校では家庭学習時間が少ない生徒が多く、自主学習ツールになると期待したが、担任などからの継続的な声かけがなければ持続しにくい。居残りを課した平成30年度にはほぼ全員が取り組み、3年次の就職試験においても効果を感じたので、担任も巻き込みながら前向きに取り組めるよう検討する必要がある。例としては、授業内や補講で利用し、有用性を生徒が感じた上で担任が勧めることなどが考えられる。

また、新しいサービスを使いこなせていない。MANABOSSを利用して3年、アップデートが加えられ、基礎学力の範囲の拡大（中学校レベルまで）や英語力向上のためのツールなど多くのコンテンツが用意された。

来年度以降は、生徒に新しいサービスを紹介し活用につなげたいが、iPadを用いた様々な取組（QubenaやEnglish 4 skills、マイクロステップ・スタディなど）との兼ね合いも検討する時期であると思う。

#### 4 人工知能型教材「Qubena（キュビナ）」活用に係る成果と課題

平成 30 年度入学生からの iPad 導入に伴い、活用を始めた。ここでは、令和元年度の取組について述べる。

##### (1) 活用状況

1 年次生に対し、算数・数学の学び直しアプリ「Qubena（キュビナ）」を令和元年 5 月から活用した。平成 30 年度と異なり、5～7 月は小学校・中学校版、7 月からは高校版を使用した。

- ・ 5 月から 9 月までは、数学 I（普通科・キャリア探求科とも 3 単位）及び数学 A（普通科のみ 2 単位）において、授業開始後の 10 分間（1 校時 45 分）取り組ませた。以降は、授業中に復習や問題演習として適宜利用した。
- ・ 学校設定教科・科目「クロストレーニング」において、月 3 回程度、各回 15 分程度取り組ませた。
- ・ 家庭学習としては自主的な取組とした。
- ・ 本年度の取組状況は、以下のようなになる（令和元年 12 月 9 日現在）。

	取組時間(分)		取組問題数(問)		正答問題数(問)	
	平均	最大	平均	最大	平均	最大
普通科	687	5,066	1,317	4,504	1,004	4,149
キャリア探求科		1,093		2,258		2,080

##### (2) 導入後の成績

###### ア 定期考査の状況

校内の定期考査の成績と取組状況（時間・問題数）との相関については、定期考査の成績の伸びに直接強く関係している様子は見られない（現在授業で扱っているのとは異なる単元を復習している生徒もいるため）。高校版に切り替えてからは、定期考査の勉強で Qubena を活用する生徒が数名おり、考査期間中にも 3 時間活用する等、継続して取り組む生徒もいた。

###### イ 模試等の状況

ベネッセコーポレーションの GTZ（学習到達ゾーン）で比較すると、今年度入学生普通科は、昨年度入学生と比べ、7 月および 11 月期の D ゾーンの増加数が減少している。

キャリア探求科においても 7 月期の D ゾーンの増加数を昨年度より減少させることができたが、11 月期の D ゾーンの増加数を減少させることができなかった。

4 月実施模試と 7 月実施模試を比較すると、成績上昇者が 43 人おり、そのうち D ゾーンの生徒は 33 人であった。

（注）（ ）内は昨年度の生徒数

	普通科			キャリア探求科		
	4月	7月	11月	4月	7月	11月
	基礎力診断	進研	進研・基礎	基礎力診	実力診断	進研・基礎
Aゾーン	2( 9)	0( 0)	0	1( 1)	0( 0)	0( 0)
Bゾーン	5(34)	9( 2)	6	3(18)	3( 0)	1( 2)
Cゾーン	25(21)	25(36)	28 28	18(16)	17(15)	11(16)
Dゾーン	47(11)	46(35)	46	18( 2)	20(21)	27(19)

### (3) 生徒・教員の感想

生徒や教員の感想から主なものを4点挙げる。

#### ① 「友達とのコミュニケーション」

わからない問題、解答の仕方が難しい問題を友達に聞くことにより、教え合いが発生する場面があった。また、難しい問題が解けるかや、解いた問題の数を友達と競う場面も見られた。

#### ② 「苦手を密かに・勝手に克服」

数学の問題が解けないことが、友人や教員に知られることに抵抗を感じている生徒が、小・中学校範囲の問題を復習することに有効であった。

また数学に対して意欲がない生徒も、間違えた問題があれば、気が付かないうちに AI が指定した復習問題に戻っているため、意図せずできなかった単元の基本問題の復習を行うことができた。

#### ③ 「中学校→高校、高校→高校のつながりが意識しやすい」

既習事項を Qubena で確認し、新習得事項を教科書で学習するという授業の進め方ができた。

(中学校の展開・因数分解→高校の展開・因数分解)

(展開・因数分解→2次方程式・2次不等式)

#### ④ 「授業への切り替え効果」

Qubena が始まったら、数学の時間という意識づけができ、授業を進めることができた。

### (4) 成果と課題

#### ア 成果

(2)イで述べたように、成績下位層の生徒には、小・中学校版での基本的な計算演習は有効であったと考えられる。また、高校版に切り替えてからも多くの問題を解答している生徒は、成績上昇または維持ができている (D3→D1、C3→B3 など)。生徒を個々に見ると、自身の弱点克服に有効に活用できた生徒がいることから、継続して利用したい。

#### イ 課題

一方、小・中学校版で意欲的に取り組むことができず7月模試で成績が下がった生徒、高校版の問題が難しく11月模試で成績が下がった生徒が多くいるのは課題である。切り替えのタイミングや、対象とする生徒について考える必要がある。

また、本年度より新しい機能「ワークブック」が加わった。教員が選択した問題を生徒に向けて配信できるシステムである。クロストレーニングで小数・分数の計算をさせたり、授業開始時の小テストとすることができるが、Qubena 内でのクラスの編成や問題の選択、量の調整などの準備が必要で、継続的に取り組むための計画づくりも課題である。

## 5 閑谷學

### (1) 3年間の概要

#### ア 閑谷學（総合的な学習の時間／総合的な探究の時間）の目標

「閑谷学校」の学びの精神を引き継ぎ、地域との関わりを重視しながら、自ら学び、自ら考える姿勢と、問題を解決していく力を身につける。

#### イ 育てようとする資質や能力及び態度

7つのチカラ（自分を理解する力、職業とつなぐ力、考える力、行動する力、コミュニケーション力、チームワーク力、自立する力）の育成に基づき、探究学習では、「情報活用能力」、「問題発見・解決力」、「表現力」を養い、進路実現に向けた能力を養成する。具体的には以下の態度・姿勢を身に付ける。

- ・自己の将来について夢や希望を持って具体的に考えようとする態度
- ・異なる意見や他者を受け入れ、相互に認め合うことを通じて、共同して課題を解決しようとする態度
- ・社会を取り巻く様々な事柄に目を向け探究することを通じて、自分の言葉で整理しようとする態度
- ・社会活動に当事者意識を持って参加し、現在および将来の学習に活かそうとする態度
- ・「閑谷学校」の精神を継承しようとする姿勢

#### ウ 閑谷學のねらい・手法

##### （1年次）

大目標：自己と学問とのつながりを調査し考察する

目標：

- ・探究学習を行うために有効な探究の学び方（発想法、調査法）、プレゼン手法、チームワークを学ぶ。
- ・グループ活動を通して、自他への想像力、学校や地域と自己の強いつながりを感じとれる。

##### （2年次）

大目標：自己と社会(世界)とのつながりを体験・調査し、考察する

目標：

- ・テーマに対する探究学習の目的、計画を教員とともに立案し、体験/探究できる。
- ・学校内外の体験/探究学習を通して、社会の諸問題と自己及び自己の進路とのつながりを感じとれる。

##### （3年次）

大目標：自己と社会/これからの世の中とのつながりを調査し、提案する

目標：自らの進路やつくりたい未来を構想し実現するために探究活動を行い個人論文にまとめることができる。

エ 令和元年度のおおまかなスケジュール（詳細は別紙 年間計画）

	1年次 学問	2年次 世界	3年次 これからの世の中
1学期	学校への適応 仲間づくり	関谷研修(進路学習) <b>探究学習</b> イントロダクション SDGs・地域課題理解、テーマ決定 ＜就職希望者＞インターンシップ準備	<b>卒業個人研究</b> イントロダクション テーマ決め作文 分野別探究 ※自己理解・社会理解 ※発表機会・内省機会
	<b>探究基礎編</b> イントロダクション 探究手法の習得1[発想法、インタ ビュー手法、アンケート手法] 地域課題理解	<b>中間報告</b>	
夏休み	ゼミ分け作文	リサーチ、＜就職希望者＞インターンシップ	(就職補講等)
2学期	<b>楷楓祭</b>		
	テーマ決定 探究手法の習得2[文献調査の方法、 プレゼン手法(keynote、ポスター)] ゼミ内発表	<b>修学旅行探究</b> ＜韓国＞姉妹校訪問 ＜関東＞企業・大学訪問	分野別探究 調査・分析・実践 論文集作成 発表準備、リハーサル
		<b>修学旅行報告会</b>	
	<b>中間報告</b>	<b>探究学習</b> 調査・分析・実践	<b>卒業探究発表会</b>
3学期	発表準備、リハーサル	発表準備、リハーサル	<b>社会人になる準備</b> 年金、着こなし講座 など
	<b>探究学習発表会</b>		
	<b>ふりかえり</b>	<b>ふりかえり</b>	<b>ふりかえり</b>

(2) 平成 29 年度入学生の取組

ア 1年次

- ・探究基礎として、調査方法（文献調査・インタビュー手法・アンケート手法）を学んだ。
- ・ゼミ担当教員の発案により、全ゼミ合同による「わくわくフェスタ in 和気関谷高校」を開催した。地域の小学生を招いて、スポーツ活動や模擬授業、ビオトープの展示等を行った。生徒たちは、自分たちの手でイベントを主催・運営することにより責任感や主体性に大きな向上が見られた。写真は「わくわくフェスタ in 和気関谷高校」の様子である。



## イ 2年次

- ・「SDGs(Sustainable Development Goals—持続可能な開発目標)を達成するために自分たちに何ができるか」という問いに対するそれぞれの解を探究することで、社会とのつながりを体験・調査・考察することを目的とした。
- ・韓国への修学旅行では、姉妹校へ訪問し、閑谷學の活動を英語で発表した。



姉妹校（韓国）での発表の様子

## 取組テーマ例と実践

- ・和気駅前商店街活性化—商店街配属の地域おこし協力隊にゼミを担当してもらった
- ・新商品開発—地元企業と共同し、新しいパンを開発した。新商品は和気校の購買で販売し、現在では定番商品として定着している。下の写真は新商品をものづくりフェスタで販売する様子である。



## ウ 3年次

- ・「自己の進路につなぐ」ことを目標に個人探究活動をおこない、卒業探究論文にまとめた。探究をすすめるに従って、自分の進路について当事者意識をもって考えられる生徒が増えた。その結果、納得感のある進路選択、そして実現へつなげられた生徒も少なからず見られた。
- ・卒業探究発表会では、会のコンセプトの決定や司会進行、会の運営のほとんどを生徒の発表会実行委員が担当した。会の後半に行われたシンポジウムでは、実行委員がファシリテーターを務め、主体的で対話的で深い学びの場を実現していた。
- ・年度当初に探究の問いを設定できるよう促した。

## 取組テーマ例

- ・すべての子どもたちに質の高い教育を
- ・人に優しい機械とは
- ・言語聴覚士の探求から「障害」に対する考え方と知的障害者の接し方を考える
- ・ストレスと向き合えるようになるには
- ・一人ひとりが輝けるためには



- ・日本とスウェーデンの社会保障制度を比べ、解決提案する ～年金編～
- ・信頼される建築士になるために
- ・人の心を惹きつけるもの

### 3年次の生徒コメント（振り返りから）

- ・実現したい未来に近づけるために大学選択や、そこで何を学びたいとかをしっかりと考えることができた。
- ・自分の好きな内容だったので、毎時間探究するのが楽しかった。最初は嫌で嫌で仕方なかったけど、達成感すごいし、自分にとって良い経験になった。
- ・良いところ、楽しいところを伝えたいのに、悪いことばかり出てきて悲しかった。けど、私がそれを変えてやろうと思った。
- ・自分が実際にしていることを、自分の言葉でまとめることができたので、しっかりまとまったものができた。



発表会の様子（上・下）



## (3) 3年間の成果と課題

### ア 成果

- ・好奇心を刺激されて、閑谷學にのめりこむ生徒も数名現れた。「学ぶ楽しさ」や自分なりの「学ぶ理由」を見つけた生徒は閑谷學に積極的に取り組むようになっただけでなく、教科学習においても意欲の向上が見られた。
- ・閑谷學発表会等で先輩の探究活動や進路実現している様子を見て、閑谷學の重要性に気付く生徒も出てきた。意欲が下学年にも伝播している。さらに広げていきたい。
- ・探究活動を通して、自分の興味・関心のありかを認識し、進路実現につなげた生徒が多い。

### イ 課題

- ・教科学習につなげていきたい。閑谷學で学ぶ意欲が高まり教科学習への意欲向上が見られた生徒も数名いたが限定的であった。
- ・3年間/1年間の足掛け/マイルストーンをもっと明確化したほうが生徒・教員双方にとって閑谷學の進め方がわかりやすくなるかもしれない。そのことによって振り返りのポイントも絞れてくる。例：7つのチカラを指標として活用する方法も考えられる。
- ・発表準備に割く時間が少なかった。これはジレンマでもある。いわゆるいい発表をすることが目的ではなく、限られた時間をなるべく探究活動に割いた結果ではある。
- ・地域課題に対して当事者意識を持つ生徒はまだ少ない。
- ・先行研究(先輩たちの探究活動)をもっと活かせる取組も可能性として考えられる。

- ・グループワークは改善の必要がある。他の生徒に依存し自らは何もしないフリーライダーが多い。

令和2年度 岡山県立和気開谷高等学校 総合的な学習の時間(平成30年度入学生) 全体計画

<b>生徒の実態</b> 多くの生徒は学習、部活動、ボランティア活動などに積極的に取り組み、地域からも熱心に活動していると評価されているが、学習面、生活面に指導の必要な生徒もあり、個々の生徒の成長が今後の課題である。	<b>各学校における教育目標</b> ①誠実な心をもって最善を尽くし、学力と教養を身につけよう ②自らを律し、主体的に考え、置かれた場で課題を発見し探究する人になろう ③自他を敬愛し、心を開いてコミュニケーションのできる仁恕の心を育もう	<b>保護者の願い</b> 進路について、家庭での話し合いが一層進むように、学校主導で情報提供をしてほしい。学校生活の中で、個性を伸ばし、責任感・協調性・社会性をしっかり育ててほしい。
<b>地域・社会の実態</b> 岡山県の東部に位置し自然環境に恵まれる。地域は人口が減少し、商店街などは衰退の傾向にあるが、町は地方創生に取り組み、人口維持施策の一環として教育を重視している。町、町教委、小中学校、商工会等の連携も盛んである。	<b>育てたい資質・能力</b> 育む7つのチカラ 1. 自分を理解するチカラ 2. 職業とつなぐチカラ 3. 考えるチカラ 4. 行動するチカラ 5. コミュニケーション力 6. チームワーク力 7. 自立するチカラ	<b>地域の願い</b> 地域には同窓生が多く同窓会からの強い支援がある。就職においても企業からの期待度は高い。地域の拠点校としての地域と協働した活動が認知されている。高校の魅力化による町の活性化への寄与が期待される。
<b>学校の実態</b> 普通科とキャリア探求科双方に科目を相互に選択できる類型がある。東備地域の人口減少が進み、高校進学者数も令和10年代後半には現在の6割程度となることが予想される。	<b>各学校において定める目標</b> (開谷學(総合的な探究の時間)の目標) 「開谷学校」の学びの精神を引き継ぎ、地域との関わりを重視しながら、自ら学び、自ら考える姿勢と、問題解決していく力を身につける。	<b>教職員の願い</b> 学力と教養を身につけ、誠実に取り組める人物になってほしい。自らを律し、主体的に考え、置かれた場で課題を発見し探究する人物になってほしい。自他を大切にし、心を開いてコミュニケーションのできる人物になってほしい。

各学校において定める内容			
目標を実現するにふさわしい探究課題	探究課題の解決を通して育成を目指す具体的な資質・能力		
(1年次) 和気高の課題に対し、地域をヒントに、どのように解決策が提案できるか (2年次) ①(就職希望者)働くことや仕事に関する現代的テーマ②(進学希望者)調査・実践を通じて地域に対して高校生として何が出来るか (3年次) 生徒自身がこうありたい未来を実現するために必要な事とは何か(生徒自身と社会のより良い未来とは何か)	<b>知識及び技能</b> 自ら設定した探究活動と他教科での学びが結びつけられる知識。また、学んだことを統合して自分の言葉でまとも説明できる技能。	<b>思考力、判断力、表現力等</b> 活動から地域・社会の課題を発見し探究できる力。探究や活動のふり返りを通して自己の在り方を考えながら適切に判断できる力。プレゼン力、質問力、傾聴力等のコミュニケーション能力。	<b>学びに向かう力、人間性等</b> パフォーマンス評価やOPP等の個人内評価から内省する力。高校内外の多様な価値観を持つ人々と交流し、地域・社会に参画・貢献しようとする態度。

学習活動	指導方法	指導体制	学習の評価
全学年では金曜6限、2年次生は火曜7限を加えた時間を「開谷學」として年間計画を作成する。時間割変更で2時間連続とすることも可能とする。また、必要に応じて長期休業等も有効に活用し、体験型学習を行う。	H/R担任による指導を基本とするが、学習内容によっては、年次団、全教員の体制で展開する。また、社会人講師の招聘や、少人数のグループを構成し各担当教員のもとでの活動、大学や企業訪問、と多様な学習形態を効果的に取り入れる。	開谷學・LHR委員会で育てようとする能力や態度を踏まえた全体目標・年次目標を提示したうえで、全体計画・年間指導計画を作成する。各学習内容については委員会と各課および年次団で連携し、実施要項を作成し実施する。	活動への興味・関心・意欲・態度、課題の設定能力や解決能力の伸長の状況などを総合的に評価する。また、出席状況、ワークシートや振り返りシートの記入、レポート・論文・ポスターなど成果物の内容などから活動の様子を把握し総合的に評価する。

各教科との関連	地域や大学との連携	小・中学校や他の高等学校との連携
各教科の指導において、自ら学び、自ら考える過程を大切に学習活動を充実させる。また、現在の学習内容が将来どのように社会に関わっていくかを意識させる教材や場面設定を工夫する。	探究学習、進路学習、体験型学習では、各分野で活躍されている地元地域や企業の方を講師として招聘し、活動場所も旧開谷学校をはじめ地域の施設を効果的に活用する。また、各年次の研究発表会への参観・講評などで連携を深める。	総合的な探究の時間の活動内容を中学校と情報交換し、活動内容の参考とする。小・中学校とは2年次生の探究活動で、出前授業や子ども塾の活動で連携を深める。

	チカラの説明	達成度 1	達成度 2	達成度 3
① 自分を理解する力	<p>将来の自分の人生の歩み方を考えていくにあたり、自分を理解し、自分らしさを確立していくことが大切です。「自分を理解する力」では、積極的に自分の興味・価値観・長所を確認し、将来につなげていく力を育てます。</p>	<p>自分は何が得意で、どんなことをするのが好きかがまだ見つかっておらず、これから探していくところである。</p> <p>自分が生きていく上で大切にしたいことをこれから見つけていく。</p>	<p>自分は何が得意で、どんなことをするのが好きかが何となくは分かっているため、これから言葉で説明できるようにする。</p> <p>自分が生きていく上で大切にしたいことも何となくは感じている。</p>	<p>活動中の経験を元に、自分は何が得意で、どんなことをするのが好きであるかを言葉で説明できる。</p> <p>自分の長所や興味から、人生を生きていく上で、自分が大切にしたいことを言葉にすることができる。</p>
② 職業とつなぐ力	<p>将来を考えていくためには、様々な職業を具体的に知り、職業を体験し、自分が職業を通して社会とどのように関わるかを考えていくことが大切です。「職業とつなぐ力」では、様々な体験から勤労観・職業観を育み、職業選択をしていく力を身につけます。</p>	<p>目標とする職業もまだ見つかっておらず、今どのような準備をするかもこれから考えていく。</p> <p>仕事についてはあまり知らず、働くことの意義ややりがいに関しても、これから見つけていくところである。</p>	<p>将来目標とする職業へのイメージはあるが、どのような準備が必要かはまだわからない。／職業のイメージはないが、漠然とやるべきことをやっている。</p> <p>様々な仕事の名前や内容についてはわかっているが、その仕事の意義ややりがいについてはよく分からない。</p>	<p>将来目標とする職業につくために、今どのような準備をすべきかを語るができる。</p> <p>今まで知らなかった職業について「こんなことをしているんだ」ということを知り、その仕事の意義ややりがいを理解している。</p>
③ 考える力	<p>何かに遭遇したときや情報を手に入れたときに深く考え意思決定し実行することは大切です。考えることで問題を解決する方向に導けます。「考える力」では、論理的思考力や創造する力を身に付けることで意思決定できる力を育てます。</p>	<p>自分たちが何に困っているのかわからないため、まずは困っていることを考えることから始めていく。</p> <p>すべきことがわからないため、すべきことを考えることから始めていく。</p> <p>実行後の振り返りをしていないため、これからは改善策と自分の変化（成長）について考えていきたい。</p>	<p>自分たちが何に困っているのかを把握はできるが、それに対する解決策を考えることが難しい。</p> <p>すべきことは分かっているが、何が優先順位が高いかが決められない。</p> <p>実行した事に対する改善策を考えることはできるが、自分の変化（成長）に関しては意識的になれていない。</p>	<p>自分たちが何に困っているのかを書き出し、困り事に対する解決策を考えることができる。</p> <p>すべきことに対して、優先順位を考えて、どれから取り組むべきかを決められる。</p> <p>何かを実行した後は、改善策と自分の変化（成長）について考えられる。</p>

④ 行動する力	世の中の様々な情報を取り入れるためには、自ら動き、選択し実行していく必要があります。「行動する力」は、実際に前に一步踏み出す力を育てます。	すべきことがあっても、ついつい「あとでやろう」と後まわしにしてしまう。 優先順位をつけても、なかなか実行できない。 失敗や困難に直面すると、諦めたくなり、投げ出してしまう。	ものによっては、思いついた瞬間に実行に移すことができる。 優先順位の高いものからいくつかは実行に移すことができる。 ものによっては、失敗や困難に直面しても、諦めず粘り強く努力できる。	「あとでやろう」ではなく、思いついた瞬間にすぐ実行できる。 優先順位の高いものから、積極的に取り組むことができる。 何に対しても、失敗や困難に直面している時に、最後まで諦めず、粘り強く努力できる。
⑤ コミュニケーション力	話す態度や聴く態度を学び、相手の気持ちを理解することは、良い人間関係を形成するのに役立ちます。「コミュニケーション力」では、お互いを理解しあい人間関係を構築する力を育てます。1対1のやりとりだけでなく、少人数での意見交換、多数に自分の考えを伝えることを含みます。	自分の頭の中にある、「こういうことを伝えたい」という考えを表現できない。 相手の立場に立ってその人の気持ちを理解しようと思わない。 状況に応じた言葉遣い・態度・行動をとろうと思わない。	自分の頭の中にある「こういうことを伝えたい」という考えを表現することはできるが、誤解のないように適切な言葉や所作を選択することには課題がある。 相手の立場に立ってその人の気持ちを理解しようとはできるが、理解はしきれない。 状況に応じた言葉遣い、態度・行動をとりたいが、やり方がわからない。	自分の頭の中にある「こういうことを伝えたい」という考えを誤解のないように適切な言葉や所作を選んで表現することができる。 相手の立場にたって、その人の気持ちを理解できる。 状況に応じた言葉遣い、態度・行動をとることができる。
⑥ チームワーク力	生活や仕事の様々な場面では、チームワークが必要です。「チームワーク力」ではチームにおける様々な役割の意味や意義について理解し、その場に応じて適切な役割や責任を果たそうとする力を身に付けます。また、相手の立場に立って考え互いに支えあい取り組む姿勢を学びます。	チームの中で役割がなく、活動に参加しない。 周りの人と関わるのが苦手で、理解や協力を得るのが難しい。 人の意見と自分の意見は違うので、聞く必要性は低いと思っている。	チームの中に役割があるが、責任を持ってやることができないことがある。 自分の意見を伝えることはたまにあるが、理解や協力を得るほど密に話し合うことは少ない。 人の意見を「この人の言うことは聞かないでいや」と心を閉ざすことなく、一旦受け止められる。	チームの中で自分の役割を持ち、責任を果たすことができる。 周りの人に自分から積極的に意見を伝えて、理解や協力を得ることができる。 人の意見を「この人の意見を聞いて、みんなでより良い意見を作りたい」と思って、積極的に受け入れられる。

<p>⑦ 自立する力</p>	<p>社会の著しい変化に対応して生きていくことは大切です。「自立する力」では、よりよい生活や生き方を実現するためにスキルアップをめざします。</p>	<p>1人で抱え込みがちで、誰にも相談することができない。 あいさつ・礼儀等のマナーが分からず、約束やルールを守ろうと思わない。 将来必要なお金や資格について良く知らない。</p>	<p>悩みがあるときは、1人で抱え込まずに、信頼できる誰か1人に相談することができる。 状況によっては、あいさつや礼儀をきちんとすることができ、約束やルールも概ね守っている。 将来必要なお金や資格について知ってはいるが、準備は十分にできていない。</p>	<p>悩みがあるときは、1人で抱えこまずに、何人かの信頼できる人に相談することができる。 常に、あいさつ、礼儀等の社会人のマナーをわかきまえ、約束やルールを守ることができる。 将来必要なお金や資格について知っており、必要な準備をしている。</p>
--------------------	----------------------------------------------------------------------------	----------------------------------------------------------------------------------------------------	-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

※7つのチカラ

閑谷學のルーブリックとして使用。年3回アンケート調査を行い、生徒自身の自己評価により成長実感を定点観測している。

## 6 生徒による自治活動～学校スローガン・行動憲章の取組～

本校では、数年前から教師と生徒が一緒になって“よりよい学校にしていくための方策”を共に考えることで、生徒一人ひとりの主体性や自己肯定感、そして、自他を大切にすることを育成し、目標意識を持ちながら日々の学習や生活に意欲的に取り組むことを期待している。ここでは、平成 28 年度から、生徒会を中心に取り組んできた事例を紹介する。

### (1) 学校スローガンの取組み

生徒全員（オール和気）で考えた  
和気閑谷高校スローガンが決定しました！！

これまでに各クラスで話し合った原案を持ち寄り、評議会・生徒会総務のメンバーで検討、その後、生徒会長・副会長、評議会代表者で最終検討をおこない、以下のように決定した。周知については、次のような教室ごとの掲示を作成し、生徒会の生徒が全校集会で報告した。写真はその様子である。



「挑 愛」 「挑」とは挑戦、「愛」とは思いやり・信頼という意味を込めています。

～思いやりあふれ、自らの可能性を信じ、学び続ける学校～ H28・29

～ 伝統と絆を未来へ ～ H30・R1

#### スローガン完成までの話し合いの経緯(H29)

話し合いの中で出てきた意見で、まず共通していた部分は、「人とのつながりを大切にしていきたい」というものでした。まわりの人を思いやり、信頼を築いていける人間になりたいという想い。これは様々な言葉で表現できますが、生徒がそれを表現するのに選んだのは「愛」でした。また、次に多く出てきた意見は、「自己の力を高めていきたい」というものです。それを実現させるために、自分を信じ、自ら行動し、学び続けることができる「挑戦の心」を大切にしていきたいということから頭文字である「挑」をスローガンに使用しました。

この2文字を合体させ、「挑愛」という造語を作成。その意味を明らかに示すためにサブタイトル「思いやりあふれ、自らの可能性を信じ、学び続ける学校」を加えています。

みんなで考えた和気閑谷高校のスローガンのもと、

オール和気で、より良い学校をつくっていきましょう！

### (2) 行動憲章の取組

ア 平成 30 年 12 月、香山校長から全校生徒へ呼びかけ

『今現在、学校生活の様々な場面、授業・清掃・服装などにおいてまだまだ改善していかなければならないことがある。本校は旧閑谷学校から脈々と続く伝統を受け継ぐ学校であり、再来年は、いよいよ創学 350 年となる。生徒のみんなが安心できる居場所をつくり、社会人としてその場に合ったふるまいができるようになって』

ほしい。和気高生としてめざすべき指針となる『行動憲章』を作ろう。以下の原案について、生徒全員が各クラスで真剣に話し合っしてほしい。』

イ 呼びかけ(問題提起)をうけて以後の生徒たちの取り組み (H30・H31)

12月 各クラスで現在の具体的な問題点を考え、行動憲章の原案について意見を出し合う。

1月 生徒会代表、評議会代表、有志生徒による協議会を開催し、行動憲章案を検討。各クラスで出た意見をもとに和気高に今何が必要なのかを考えた。

1月 生徒の修正案について、教員アンケートを実施。

3月 再度、生徒会代表・有志生徒で検討したうえで、教員と直接意見交換をする協議会を開催し最終検討。⇒ 行動憲章を決定し、4月の全校集会で発表。

岡山県立和気閑谷高等学校 行動憲章

**信**：仲間の挑戦を支える

**勤**：絶えず目標を立て、懸命に取り組む

**儉**：失敗を意味あるものにする

集会での生徒代表の発表の要旨

行動憲章とは和気高生の望ましい行動の目標、理想の姿を表したものです。

最初に、信(しん)について説明します。信は、「仲間の挑戦を支える」にしました。

校長先生の案である「仲間の挑戦を邪魔せず、支える」という言葉に賛同しました。しかし、「邪魔」というネガティブな言葉はいれたくないと考え、この言葉にしました。「支える」という言葉には、「見守る」「応援」「足をひっぱらない」という意味合いも含まれています。

次に、勤(きん)について説明します。勤は、「絶えず目標を立て、懸命に取り組む」にしました。充実した学校生活には目標を持つという事は必要不可欠です。大きな目標、目の前にある目標をたて学校生活を送ることが望ましいと考えました。しかし、目標を持っていない生徒もいるという現状から、目標があることを前提としない方がよいと判断しました。また、心から本気になり懸命に活動する姿勢を大切にしたいという思いからこのようになりました。

最後に儉(けん)について説明します。儉は「失敗を意味あるものにする」にしました。

まず、儉約の「儉」をここでは「無駄にしない」という意味でとらえました。

失敗をそのままにするのではなく、次の糧(かて)としてその失敗を無駄にせずに、次の行動に反映させていくという意味でこの言葉にしました。ここでいう失敗は、服装の乱れや、授業での望ましくない行動なども含まれます。頑張っている人を様々な形で「支え」、

自分も頑張ろうか、と「目標をたて」努力し、自分の今の状態として、「失敗」していることをどうすべきか考えてみてください。

これはあくまでも一例ですが、皆さん自身の中で「信」「勤」「儉」のどれから進めていくのか、どれを特に頑張りたいのか、考えてみてください。

今この発表で行動憲章の取り組みが終わりだとは思っていません。これから、より学校が良くなるように、生徒会や評議委員、先生方、また、皆さんとともに盛り上げ、皆さんにとって充実した和気高を作っていきます。一緒に新しい学校を作っていきましょう！ご協力よろしくお願ひします。ご清聴ありがとうございました。

### III 研究の成果と課題

#### 1 成果（その1）

主体的な学習者を育てるために組織的・計画的に実践できる学校組織を構築できた。

- (1) 互いの工夫を学び合い（職員会議後の校内研修）、専門家の指導（教科別WS）を取り入れながら授業改善に取り組む仕組みが整った。

その成果を教職員一人ひとりが実践報告にまとめ、平成30年度、令和元年度の2年間、HPにアップした。（II 具体的な取組のパフォーマンス課題の項を参照。）

- (2) 生徒が自分の学びや成長を語る場面を全年次の取組として実施。

学校行事や学校生活等においても振り返りや生徒が自己評価を実施した。特に、7・12月に実施される三者懇談で、自分の成長について「論語手帳」やiPadを用いて準備し、プレゼンする機会を全年次で設けた。R1年度からは、「学修ループリック」を活用し、評価の目安と具体的な根拠を語れるようにした。

- (3) 生徒の意見を学校運営に組み込む仕組みを設けた。

学力向上の取組を定期的に評価する仕組みとして、年3回、学力向上評価委員会を開催し、生徒の意見や評価を取り入れ、改善にいかすようにした。平成30年度末から特に課題として挙げた「学習に集中できる環境づくり」に対する教職員の投げかけを受け、生徒会や有志生徒が、自らの言葉でとらえなおした「行動憲章」（本校の理想の生徒像）を、令和元年度当初の全校集会でよびかけた。それを受けて、今年度は、学力向上評価委員会に参加する生徒も、クラスからより志のあるものを募った。

#### 2 成果（その2）

自分の言葉で、自分の学びや成長を語れる生徒が育ってきた。

1 (1)成果（その1）に述べるような学校の仕組みが整ってくることによって、自分の言葉で、自分の学びや成長を語れる生徒が育ってきた。これは、授業場面に限らず、多く



の場面で、内省し、自分の言葉でまとめ、発表する機会をつくってきたことが奏功している。

また、学校生活に意欲的に取り組み、成長を強く実感している生徒が増加している。

(1) 各種アンケート等の結果にみられる生徒の量的変化

- ① 学校自己評価アンケート（10月実施・よくあてはまる・あてはまる・あまりあてはまらない・全くあてはまらない）の「授業」の項目で「よくあてはまる」と回答した生徒が増加。

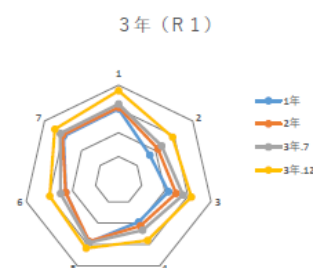
項目	授業内容は工夫されて分かりやすく、学力向上に役立つ			
	H28	H29	H30	R1
「よくあてはまる」「あてあまる」	76.9	75.2	69.6	75.9
「よくあてはまる」のみ	23.9	21.6	25.4	<u>29.0</u>

- ② 学校満足度アンケート（1～2月実施・思う・やや思う・あまり思わない・思わない）調査で、「意欲」「成長」の項目で「思う」と回答した生徒が増加。

項目	学校生活に意欲的に取り組んでいる				自分は和気高で成長できた			
	H28	H29	H30	R1	H28	H29	H30	R1
「思う」「やや思う」	75.1	73.9	69.4	70.9	70.4	71.8	67.2	66.9
「思う」のみ	29.0	27.4	29.4	<u>33.1</u>	27.5	23.8	28.2	<u>28.9</u>

- ③ 7つのチカラアンケート（平成29年度入学生）の3年間の変化

7つのチカラとは、本校が卒業までに身に付けさせたい資質・能力のことで、1 自分を理解する力 2 職業とつながり力 3 考える力 4 行動する力 5 コミュニケーション力 6 チームワーク力 7 自立する力 のことである。右図から、3年次までに、ほぼバランスの取れた正7角形となり、これらの資質・能力について理想的な成長を遂げている。



- ④ QU検査結果から、教師との関係と進路意識が向上し学校生活に意欲的な生徒が年々増加している。

クラス分け・その他諸々の教育活動によって変化する集団の学級満足度を調査し、クラス運営の手がかりを得るとともに、個の変化を把握することで生徒のつまづきを発見し、支援の手がかりとするために、毎年1年次の5月、10月にハイパーQU検査を実施している。

○ 生徒の変容

研究指定を受けた3年間で、学校生活意欲の総合点が大きく上昇している。2017年5月の学年平均が73.7、多少の昇降はあるものの、2019年10月には80.0になっている。上昇の要因は、教師との関係と進路意識の上昇にある。2015年5

月のデータと比較するとわかりやすいが、この3年間でも全体的に上昇している。閑谷學で外部と交流したり、早朝から部活動に取り組んでいたり、意欲的に学校生活に取り組んでいる生徒の数が増加していると考えられる。ただ、学習意欲や学級との関係に関しては、どの年度も5月から10月になるにつれて下降傾向にある。

実施の概要 及び 結果

研究対象生徒	2017年5月	2017年10月	2018年5月	2018年10月	2019年5月	2019年10月
1年次定数	120人	119人	112人	111人	120人	120人
教師との関係	14.1	14.8	14.5	14.6	15.6	15.8
進路意識	13.7	14.3	14.1	14.2	15.0	15.3

比較	2015年5月	2015年11月
1年次定数	120人	119人
教師との関係	13.2	13.5
進路意識	13.5	13.7

(2) クロス集計にみられる生徒の成長(令和元年度3年次生の結果から)

クロス集計とは、3年間の生徒の変容・成長をはかるため、様々な取組によるデータを並べて比較したものである。特に3年次生では、保護者懇談前に自分で振り返り、目標に向かって進めているかを確認するためにも用いた。

350 整理番号 3年 2組 46番 和氣 陽子

和氣閑谷高校 学びの履歴書

	1年次												2年次												3年次											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月			
模試総合	C2			B3				C3	C3				B2					B3	B3	C1				B3	B3			C2	B2							
国語	B1			A3				B3	B3				B2					B2	B3	B3	C1			B1	B2			B2	B3			C1				
数学	C3			C2				D1	D1				B3					B3	B3	C1				B2	B3			B3	C2			C2				
英語	C3			C3				C1	C1				C2-					B2	B2	B3				C1+	B1			C2	B3							
学習実態	48	49		62				179	134				29	129				290		280			126	94	387		163									
定テスト		78		79				71	81				75	77				75		77			78		66						67					

[模試：基礎力診断テスト、実力診断テスト、進研記述模試、進研マーク模試より受験]

[学習実態調査：4月は年度初めに、その他はテスト前に1週間程度実施]

[定テスト：定期考査の全科目の平均点]

	4月模試×1学期中間考査	11月模試×2学期中間考査
1年次	0.687	0.21
2年次	0.694	0.72
3年次	0.60	11月模試を実施せず

この表は、模試と定期テストの時期に近いものを、模試全体成績と考査平均点で計算した相関係数である。中間考査を対象としたのは、考査の素点であるため、より模

試学力に性質が近いからである。

全体として高い相関があり、定期考査に前向きに取り組んでいる生徒は、模試の成績にもつながっていることがうかがえる。

### (3) 生徒の事例

ここからは、入学時と比べて定期テストを始めとする学習活動に特に積極的になった生徒の中から、一つ事例を紹介する。また、その事例から他の生徒にもつなげられる好要因を考察する。

#### <事例紹介>普通科理系

就職を希望して入学してきた生徒であるが、県外で行われたラウンドテーブルに参加した際、校外の方と話しをしたことで、理系の進路に関して興味をもつようになった。

また、身近な人がリハビリをする場面があり、自分の学んでいること、学びたいことが実際に役に立つという繋がりを感じ、主体的に学習するようになった。それは学習習慣や授業にも良い効果をもたらした。

右の表は、この生徒の模試の成績である。模試成績を上げることはもとより、維持することもままならない生徒が多い中で、こ

時期	1年4月	2年4月	3年4月
GTZ	C2	B3	B3

の生徒の他と違う点は、学びと日常、将来を結び付けて考えることができたことである。

閑谷學の時間や、進路について考える際に教職員から様々な問いかけを受け、徐々に『自分ごと化』することができた。その結果、自分の考えや疑問を言葉にすることができるようになり、それが評価され、大学への進学を決めている。

この事例を他の生徒に広げていくには、閑谷學の時間を効果的に利用することが一つの方法であると考えている。中間発表会や普段のゼミ内で、生徒が設定した”問い”がさらに深まり、広がり、自分と結びつけていけるような問いかけをしていきたい。

例えば、「何故こうなったのか?」「どうしてこう変化したのか」「そもそも何が原因か」など探究が深まる問いかけである。

本事例に限らず、学校内の教職員からの声掛け以上に、学校外の大人が生徒にかけてくださる声かけがその生徒自身の成長に及ぼす影響は大きい。「校外へ出る様々な機会をとらえ、一人の生徒に偏ることなく多くの生徒に与えられることによって、チャンスをつかんでほしい。」という意見が事例の生徒自身からあったことも付記しておく。

## 3 課題

### (1) 学校組織の課題

一層主体的な学習者を育てる学校組織にしていくために、次の2点が課題である。

- ① 全ての教育活動の意味が生徒自身の中でつながるように、一層生徒に届く言葉で伝える工夫をする。

授業における「目標」や、長期ルーブリックで3年後の成長の姿を生徒と共有などは、現段階でも行っていることである。それに加えて、「日々の授業(=教室での学び)が模試成績に関係している」ということ、さらには、模試成績を上昇させることの意味、あるいは、生徒の生活にある学校行事の意味など、生徒が自分の成長の物語が語れるために、一つ一つの体験を結び付けるための工夫を行っていく必要がある。

② 上記①の課題を解決するために、教師自身が現状を分析・説明できる言葉を持つ必要がある。

平成30年度の学力向上評価委員会で得た知見を一例にすると、「学習実態調査で勉強時間が増えれば、定期テスト、模試の成績も上がる」という例を紹介した際、生徒参加者から、『頑張れば成績が上がる、というのは小学校から言われているし納得できる。具体的な事例、頑張り方が分かれば、もっとやる気が出る』という意見があり、進路指導課からは、模試を受けた際の生徒の振り返りはするものの、教員間での振り返りや分析は不十分であった。具体的な数字を踏まえて生徒に伝え、授業に反映する取組を強化する必要がある。

## (2) 生徒の成長に関わる課題

成果として述べた生徒の成長が、全ての生徒に当てはまっていない点である。「学校満足度アンケート」からは、常に30%前後の生徒が、「意欲」「成長」の質問項目に対して、否定的な回答をしている。こうした生徒が本当に「成長した」と実感できる教室や学校を創っていくことを目指して本研究を進めてきたにもかかわらず、依然、この課題を残していることを真摯に受け止めなければならない。

上記(1)で挙げた2点の課題を、教職員一人ひとりが実践していくとともに、学校組織として一層、推進していく必要がある。

## おわりに

令和2年3月4日の職員会議後の校内研修で、今一度、本研究のテーマに達成を目指すために、約3割の生徒を、学校の取組にどのように巻き込んでいくか、アイデアを出し合う機会を持ちました。そこでは、授業に係る工夫も多く挙がりましたが、学習集団づくりや教師と生徒との関係性、教室環境整備等の生徒の学習レディネスに係る視点からのアイデアも挙がりました。教職員一人ひとりが、授業で、授業外で、分掌で、生徒一人ひとりをどのように育てていくか、真剣に考える場とすることができました。そうした改善のための私たち教職員の様子について、高旗先生は「議論の熱量は半端ない」と評してくださいました。と同時に、その熱量が、日々の教室での授業における成功体験につながっているだろうか、という課題を投げかけていただきました。また、山元先生からは、平成29年度においでいただいた時から、授業における「対話」を通して「生徒に向き合いながら寄り添おうとする姿」を評価していただきましたが、実践が「文化」として引き継げているのか、と考えますと、まだ道半ばの状態です。

学びに向かい、仲間とともに伸びてゆく、生徒一人ひとりの喜び。日々、工夫を重ねながら、そうした生徒にかかわる私たち教職員の喜び。こうして、学校全体に、喜びの光が満ち溢れていく…。そのような、光あふれる学校を目指し、「できるところからぼちぼち」と、生徒とともに、明日からも教職員一同で歩んでまいります。

最後になりましたが、本研究を御支援くださいました山元隆春先生、高旗浩志先生をはじめ、それ以前の授業改善の取組からかかわってくださいました多くの方々に心より御礼を申し上げますとともに、今後とも引き続き御指導くださいますようお願い申し上げます。

令和2年3月 岡山県立和気閑谷高等学校学力向上推進委員会

広島大学大学院教育学研究科 教授 山元隆春  
岡山大学教師教育開発センター 教授 高旗浩志  
校長 香山真一 教頭 上野修嗣 主幹教諭 大野浩志 (H29・30)  
進路指導課長 (H29・30)、主幹教諭 (R1) 福田浩司 指導教諭 鈴木渥子  
教務課研究主任 指導教諭 荒金恭子 進路指導課長 藤澤晃 (R1)  
進路指導課企画調査係 (H29・30)、進路指導課長補佐 (R1) 太田悠未  
教務課 采女結 (H29) 荒木喜子 (H30) 福田裕也 (R1)  
生徒課長補佐 矢吹伸介 (H29) 野本竜太 (H30) 生徒課 (R1) 大山典子  
和気町支援職員 江森真矢子 (H29) 古賀敢人 (H29・30) 宮部信之 (H30)  
H29年度入学生の閑谷學担当者 和気町支援職員 中村哲也  
上記以外の H29～R1 年度の岡山県立和気閑谷高等学校教職員一同  
各クラス評議会委員の生徒 24 名 (H29・30) クラス有志の生徒 24 名 (R1)